
期待外れの男

赤堂小高

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

期待外れの男

【Nコード】

N5916V

【作者名】

赤堂小高

【あらすじ】

彼の名は霧島法幸。趣くままに運命を変えられない男。運命に嫌われた男。期待外れの男。過負荷としてありえない程に善良な心を持っているのだが、彼の持つ体質の性質上、やっぱり過負荷。彼は幸せをその手に掴むことが出来るのか。

鬱思考が多いです。地の文が多いです。原作に関わるのは生徒会戦拳ぐらいのつもりです。そういったものが嫌な人は読むのをお勧めしません。不定期更新です。

第1失敗 「死にたくて」

小学一年。

死の概念を知った経緯はあまり思いだせない。

道徳の授業で習った気もするし、猫の死骸を見ていて母に教えられた気も、父にテレビで人死にのニュースが流れている時に教えられた気もする。どうだったかは今一曖昧で思いだせない。

ただ、『死は怖いなあ。……お父さんとお母さんはずっと死なないといいなあ』と思った日。そんな日。

二人は死んだ。

そのことを知った時は、絶大的な喪失と共にただ理解した。否、させられた。

ああ、そうか。僕が学校で苛められるのも、不幸としか言いようのない日々を送っていたのも、やろうとすること為そうとつすること全てがことごとく失敗するのも、全部全部僕の所為なんだ、と。僕の体質の所為なんだと 本能的に理解してしまった。

優しい母。優しい父。僕はそんな両親を殺してしまった。僕を愛してくれた両親を僕は、僕自身ふざけるとしか言いようがない己の体質によって殺してしまった。

葬式。墓。遺骨。遺産。親戚。

それからの記憶はひどく朧気で

ふと気がつくとき、僕は親戚の家に引き取られて暮らしていた。

ただ、どこまでも異常な僕を親戚の人が大切に扱うはずもなく。

僕は家でも小学校でもどこでだって化け物を見る目で見られていた。

いつだって優しくかった両親がないこと以外は以前と変わらぬ日々。親戚や級友の扱いになんら不満は無く。

むしろ、彼らの扱いはとても正しいと言えた。

僕と親しくなると不幸になることは、歴然とした真実なのだから。

それなら最初から親しい人なんて要らない。僕も相手も傷つくだけで、失うだけなのだから。

通学中。

大型のトラックが信号を無視して突っ込んでくる。

ブレーキやハンドルが効いていないのか、かなり焦っている運転士の顔が見える。

走馬灯。両親と過ごした日々。

それはとつても優しく輝いていて
もう決して手に入らないもので

あーあ、もっと生きたかったのになあ。

いや、やっぱり死にたいのかもしれない。だって、生きていたって
二人が居ない今、僕が生きたい理由なんてあるわけもなく。

それでも、不思議と少しは生きていたく。
でも、やっぱり死にたくて。

本当に本当に死にたくて。その思いは生への渴望より大きくて

突っ込んできたトラックは突然不自然に転倒し僕の方へと滑ってきて、僕と1メートル程間を開けて停止した。

忌々しい。結局ふざけた体質の所為で死に損なってしまった。

それから、一週間に三度ほど、色々な車（トラックが一番多い）に
突っ込まれるようになった。

『近くに車、特にトラックがあつたら突っ込んでくると思え』、そんな教訓を自分の中で掲げているが、全然笑えない。
むかつくので自分から当たりに行くようにしている。そうすると勝手にトラックは避けてくれる。

トラックの中の人については知らないし、僕以外の他人ひとについては知らない。興味も無いと言えは嘘になるが心配はしない。というより、してはいけない。心配など以ての外で、僕が心配した瞬間その人がもし瀕死だったりした場合死は決定されるだろう。そういう腐った体質を僕は備えているのだ。

だから、他者を気にしないというのは僕なりの優しさなのだ。いつだって変わらない巨大で広大で不動の『世界』に免じての僕なりの優しさなのだ。

『世界』には僕の体質も通用しない。その事実が少しの安心感をくれたから、僕はこの『世界』は好きだ。

さて、向かってくるのは乗用車や高級車だったりすることもありますが、最も多いのはトラックなのだ。

それは何故か？

それは、僕がトラックが嫌いだから。

お母さんとお父さんを僕の代わりに殺してくれやがった存在だから。

この世界からトラックなんて消えてしまえばいいのに。

この世界から僕なんて消えてしまえばいいのに。

そうなっていたら、二人は死ななかつたはずだ。少なくともあの日には。

『期待外れ』。

自分の体質の呼称名として、そう名付けてみた。

基本的に乗り物に乗ると事故る。

基本的に歩いていると事故・事件に遭遇する。

なんだ「基本的」って。なんの基本だよ、と言いたくなるこれらの不幸はおまけみたいなもので、僕の体質の真骨頂は別にある。

やろうとすること為そうとすること、全てが失敗する。

なにかを願ったり望んだりすると、そのなにかは叶わない。

やるとしてない時や為そうとしていない時なら出来たりもするのだが、いざやろうとすると出来ない。

願うことは叶わず、望んでいないことばかり起きる。

いつまでたっても達成感は味わえず、満たされることなどありはしない。

そんな体質。^{マイナス}

だけど、もう慣れた。

体質を自覚する前はただただ絶望していたが、僕は知ってしまった。僕は、元から出来ない存在、出来なくて当たり前、満たされなくて当たり前、^{マイナス}幸せになれなくて当たり前。そういう存在なのだ。

最初っから過負荷を伴った存在なんだ。^{マイナス}
なら納得だ。最初っからそうなら仕方がない。ふざけんとか言
いようがないぐらいに仕方がない。

本当に仕方がない。泣きたくなくなるぐらいに、仕方がない

「法幸^{ほうしゆん}くんは一人暮らしがしたいのかい？」

「はい」

「そうか、君には君の両親が残したお金があるから高卒まではそう難しくはないと思うよ。」

「……どこに行きたいんだい……？」

始終嬉しそうにしていた親戚を、僕は、まあそうなるよね、と冷めた目で見ている。

とにかく、僕が楽しく暮らすためには一緒に暮らす誰かは不要だ。それは僕のためであり、その誰かのためでもある。

この親戚の人は常に僕に冷たく接し、僕になつかれるという愚行を犯さずに済んだのは行幸だったと言える。

とにかく一人で暮らして、己の体質について、生きる意味について、人の価値について、目的について、答えを見つけない必要があると思う。

その答えを見つけないで、僕は、ずっとずっとこのまま死に損な

って生き損なって、ただただ過負荷マイナスの、絶望と狂気の渦に沈み続けることになる気がしてならないから。

第1失敗 「死にたくて」（後書き）

はっきり言おう。

この小説は多分、きつと、かなり、いや結構、大幅に、暗い話になると思います。

一応言っておきますと、

私としては、『戯言』のいーちゃんや『嘘つき』のみーくんなキヤラ、暗いけど愉快な語り部にしたいと思っています。そういう方針です。あーゆうキヤラ大好きですから。

また、ノルマとして一週間に一回ぐらいのペースで更新していきたいと思っています。そのノルマを達成できるかどうかは別として。

第2失敗 「これからよろしくね」

その日、僕こと霧島法幸は同類^{マイナス}と出会った。深く考えずに僕は、その子の手を取ってしまった。同類なら別に死んでもいいよね、と思いながら。僕もこんな目をしていたのかなあ、と思いながら。深い深い絶望と怨嗟の目に強い共感を感じてしまったからには、最早手を取ること以外は出来そうもなかった。

「死にたくなかったら僕に近付かないでください」

クラスメイトとなる人々にそうとだけ告げて、僕は学校で浮いた存在となった。

狙い通りすぎて笑えた。まあ、笑わなかったけど。

そもそも僕は学校なんて来たいと思っていなかった。

出来ることなら、ずっと家で引き籠っていたいぐらいだ。そうすれば誰も傷つかない。

それでも、僕が学校に通うのは親戚の叔父さんに課せられた義務だからだ。

叔父さんは僕への接し方こそ碌でも無かったが、引き取ってくれたり両親の遺産の管理をしてくれたり、十分良い人の部類である。

だからこそ、迷惑はかけられない。とりあえず、成人して独り立ちするようになるまでは指示に従っておこうと思う。せめて、バイトでもして生活費を自分で稼げたら良かったんだが、如何せん、今の自分は小学二年生である。雇ってくれるところなどどこにもないだろうし、なにより僕は失敗ばかりする男だ。きつと業務など出来ないだろう。

とりあえず、『期待外れ』は、どうにかして制御していこうと思う。そうしないと、本当の本当になにもできなくなるからだ。前に一度だけ、呼吸することを意識してしまい、呼吸に失敗して呼吸困難に陥り気絶したことがある。歩くことを意識してしまい歩けなくなったことは一度と云わず何度もある。対処法は眠ってしまふことや、考え事に没頭することだ。気付くと、自然と歩けるようになっていく。

僕の過負荷は、認識と意識が深く関係しているようなのだ。為そうとすると、挑戦意識を抱くと、失敗する。あることを認識し、認識上のものに『期待外れ』は作用される。

例えば、僕が他者からの攻撃を受けようとしたとする。

『期待外れ』が作用すると、“攻撃”を受けることを失敗することになる。

だが、攻撃といっても色々あるだろう？

物理的暴力、口撃、飛び道具、絞め技投げ技、毒、等々。

『期待外れ』の効力が適用されるのは、僕が“攻撃”だと認識するものだけなのである。

このことに気付いたのは、同級生からの苛めの対処をしていた時のことである。

まず、物理的暴力を受けることは簡単に失敗出来た。僕としては、

成功してた方が嬉しいわけだが。

その後に、陰湿的な嫌がらせをもらに受けることが出来た。机に落書きとか、下駄箱に……とか。

僕は、“こんな攻撃”もあるのか、と感心すると、嫌がらせを“攻撃”だと認識した。してしまった。

次の日から嫌がらせはぱったり止んだ。

普段何も考えずに歩行や呼吸が出来るように、意識せずとも出来ることは出来るのだ。失敗したりしない。

僕は、そこにこの過負荷マイナスの抜け道を見つけた気がした。

つまり、『期待外れ』を作用させないようにするためには、意識が一定方向へ向かないようにし、また何事も息をするように出来るようになればいいのである。

僕は、過負荷制御マイナスに関してはそういった指針を掲げることにした。実際のところ、制御というより、抑制に近いのだが、他に対処法は思いつかないのでどうしようもなかった。

小学校に通っている間、ひたすら過負荷の制御に執心して過ごした。どうせ、やることもない。

その過程で僕の人格や心はどんどん薄れていった。当たり前だ。

意識が一定方向へ向かないということは、なにも感じないし思わな
いということだからだ。

そんなことを目標にしていれば、『自分』なんて徐々に消えていく。僕は、『自分』を消すことは嫌だった。誰だって嫌だろう。死ぬのはいい。むしろ死にたい。でも、『自分』を失くすのは嫌だった。というより、両親のことを忘れてしまうのが嫌だった。だからこそ、どうにかして過負荷制御と人格保持を両立させられな
いかと考え続けた。

その結果、考えついた方法はこうだ。

薄情な人格であり、あらゆる事柄を客観視する『傍観状態』^{モード}。

元の人格を有した素の状態である『根幹状態』^{モード}。

この二つを使い分けることで、過負荷制御と人格保持を両立させる。

そして、僕は疑似的な二重人格の道を歩み始めた。

小学校に転校してきて一年ほど経ったある日、自分と同じように学校全体から浮いた少女を見つけた。

噂だけは聞いていた。なんでも、あらゆるものを腐らせる両手を持つてるとか。

能力だけ聞けば、どこかのバトルマンガに出ていてもおかしくない少女だと思った。ただ、平和な現代だと使い道があまりないと思うが。

一人でのっそり、とぼとぼと歩いていて、なんとも暗い雰囲気を感じていた。

もしかして僕もあんな感じなんだろうか、そりゃ苛められるわ、と思っただけ、なんとなく話しかけてしまった。

「ねえ、きみ、名前は？」

「……………！！」

わたしは…………、江迎怒江」

少女もとい怒江ちゃんは怯えたように僕を見た。

えーと、特に怯えられる理由に思い当たる節がないな。つまり、僕には関係ないところで身に着いた習性だな。

「きみって、両手に腐らせる力があるらしいね。興味があるんだ。」

「ちょっと右手を見せてくれる？」

怒江ちゃんは、あからさまに嫌がり躊躇っていたが、僕がずっと無言で見ていると、仕方ないと言った感じでおずおずと右手を差し出

してくれた。

僕は、一步出て怒江ちゃんの腕を左手で掴んで動かせないようにすると、彼女の右手に自分の胸を押し当てた。

分かります、こういうプレイですね…ってちがうからね？誤解しないように。

女の子の手に触れたかったただだから…ってやべっ本音が…、なんてね。勿論嘘だからね。

怒江ちゃんの手に触れた僕の服の一部分はすぐさま腐った。

それを見て、しまった！？と思ったのは内緒。

僕は動じてはいけない。淡泊でクール、それがこの傍観^{モド}状態だからだ。

服の胸部分が溶けるように腐って消えた。

僕は、さらけ出すこととなった自分の肌を怒江ちゃんの手押しあてた。

行動だけだと、変態にしか見えない。

怒江ちゃんは、動揺と怒りと羞恥と絶望から、手を離そうとするけど僕が掴んでいて離せない。

彼女は諦めて、恐る恐る自身を腐らせただろうものに目を向けた。そして、驚愕することになる。

「え？…なんで」

僕の胸は腐っていなかった。

あー怖かった。

死ぬかと思ったよ。もし腐ってたら、心臓も巻き込んで腐ってただろうしなあー。

あーあ、今度こそ死ねるかと思ったのに。

とりあえず、他のところ腐らせまくれば死ねるかな？
よし、僕を腐らせてくれ！！

彼女の右腕を掴んでいた左手を離す。
そして、今度は右手で彼女の右手を掴んだ。
握手のような形になったが偶然だ。

「……………！？」

……………あ、あれ？ 腐らない、なんで？」

はい失敗。腐らせてもらう作戦が失敗したぜ。
さすがの期待外れ男だな。

というか、傍観状態だったのに自分の欲が出ちゃってるよ。
ダメだなー。仕切り直しだな。

こんなんじゃ、制御なんて出来ない。

しかし…、今なお戸惑ってる怒江ちゃんには悪いが、君には失望し
た。

いや、僕が期待したのが悪いんだけどさ。

少なからず、怒江ちゃんにも理由があると思うんだ。

だって、この子、僕と同類マイナスだろう？

だったら、彼女になにかを期待するのも間違ってるんだ。

……………まあ、でも、戸惑う怒江ちゃんを見てて純粹に可愛いなあ、面
白いなあ、と思ったのも事実だから。

「これからよろしくね、怒江ちゃん」

「え…？ う、うん…」

怒江ちゃんとなら、友達になれるかもしれない。

そう思い、そんなことを言ってしまった。

もしかしたら、笑顔もおまけで添付してしまったかもしれない。

はははは。ま、どーでもいいか。普通にOKしてくれたし。 意

味分かつてるのかは微妙だけど。

考えてもいい。感じてもいい。だけど、全てを客観視しろ。全てを傍観しろ。ってね。

うん、さっきは失敗しちゃったけど、傍観状態の完成度は上がってきてる気がするな。

このままいけば、期待外れに振り回されることも少なくなるだろうな。

なにはともあれ、友達が出来るのは嬉しいことだと思う。

本当によろしくね、怒江ちゃん。

死んでもいいと思える友達なんて初めてだ。

友達ってもっと優しく暖かい定義のものだと思ってたんだ。

でも、やっぱり過負荷マイナスの友達なんてこんなものなのかね。

それは、とっても虚しいな……って、僕は思うのでしたとさ。

第2失敗 「これからよろしくね」(後書き)

はつきり言っておく。

この作品のヒロインは、江迎怒江ちゃんだ。

でも、キャラが一番崩れるのも怒江ちゃんだ。

マイナス成長した結果がああのヤンデレっぷりだとすると、子供の頃は少し狂気的な普通の子だったと思うんだ。

……あの包丁掴んでるのとかマジ怖え。せめて柄を持って、柄を。そう思ったのは私だけじゃない筈。

彼女は、これから主人公と関わっていくんで原作から離れると思う。それでも片鱗は残るだろうけど。

「俺の怒江ちゃんはこんなじゃねえ！」って成る可能性大なので、怒江ちゃんファンの人こそ、気を付けて下さい。

第3失敗 「わーい」

「手、離してくれる…?」

「い、嫌……」

怒江ちゃんによろしくしたのはいいけど、あれからずっと彼女は手を離してくれない。

歩きにくいから、握手じゃなくて、右手左手で手を繋ぐ形に直すことには成功したけど。

今、僕は家にいる。家と言っても、僕はアパート住まいだが。

学校に行く途中だった筈なのに、なんで僕が家にいるかというところ、それは彼女に服を腐らされたからだ。

端的に言くと、今の僕の格好は、胸部を露出した変態小学生なのである。

その評価が嫌なので、家に着替えを取りに行くことにしたのだ。

道中、一般^{ノーマル}人に奇異の視線を向けられたが完全無視。

おどおど、あたふたする怒江ちゃんを連れて速やかに家に帰って来た。

本当は怒江ちゃんを連れてくるつもりなんて無かったんだけど、手を離してくれないのだ。面倒だったので連れてきた。

家に帰って来て、二人きりになったので傍観^{モード}状態から根幹^{モード}状態に移行した。

少しは人間味が溢れて、怒江ちゃんも対応しやすいだろう。

「着替えたいから手離してくれろ？」

それと、部屋から出てってくれると嬉しいかな」

「…………え？ あ、うん…！」

怒江ちゃんは、僕がなにをしようとしてるか気付くと、頬を赤く染めて手を離すと慌てて僕の部屋から出て行ってくれた。壁とか触られて腐らされたら溜まったもんじゃないんだけど、そんなことしないよね……。しないと信じておこう。

僕が替えの制服に着替えようと服を脱ぐと、僕の部屋と居間に繋がる壁が腐り落ちた。

これで、部屋数が一つになったわけだ。居間だけ。

テレビでしか見たことが無い貧乏アパートの一室みたくなったということだ。

あちゃあ、と思って部屋の入り口を見てみると、やっちゃった……！！って顔をした怒江ちゃんがわたたと焦っていた。というか、壁一つ腐っちゃったんだし天井落ちてきたりしないんだろっかな？と若干不安になる。

それに、大家さんになんて言われるかな……、黙っとけばいいか。そうしよう。

とりあえず、怒江ちゃんを慰めることにしよう。

「怒江ちゃん。家の物に手で触れるの禁止。

あと、僕の服にも触れないでくれ」

「…うん。ごめん…」

僕が慰めという代名詞の忠告をすると、怒江ちゃんは目に見えて落

ち込んだ。

なんとという分かりやすさだろう。傍観状態じゃなくても分かっちゃうね。

「あんまり見ないで欲しいなあ」

僕、着替えの途中だからさ。

穴あき制服を脱いだところだったので、現在、上半身裸である。

「あ…！？ じ、ごめん…」

怒江ちゃんは後ろを向いてくれたので、ささっと制服に着替える。私服登校が許されている小学校もあるみたいだし、僕もそういったところが良かったかな。一々、着る服を制限されたくないしな。

実を言うと、小学三年生同士だし着替えを見られても特段恥ずかしくもないのだが、紳士淑女のマナーとして言うておいたただけだ。

着替え終わると、彼女に話しかける。

「さて、もういいよ。」

少し、話をしようか

「う、うあ……」

「……なんで泣いてるの？」

こっちを向いた怒江ちゃんはなぜか泣いていた。
手で涙を拭うが、涙は床に零れ落ちていく。

床を汚すんじゃないか。と思っただけど、壁の腐敗跡が残ってるから大して変わらないか。

無言で怒江ちゃんが泣き止むのを待っていると、怒江ちゃんは落ち着いたのか、泣くのを止めて質問してくる。

「なんで……私の……手を取ったの？」

それに……よ、よ……よろしくって。

あれ、どういう意味……？」

んー、まー、あれだけじゃ意味分かんないか。

説明しときますか。

「手を取ったのは、僕が腐るかどうか試しただけ。

よろしくって言ったのは、怒江ちゃんとなら友達になれるかなあ……

……と思っただね。

遅れたけど、僕は霧島法幸。

さっきは言葉が足りなかったみたいだけど……、怒江ちゃん、僕と友達になっってくれるかい？」

ふっ。格好付けて紳士っぽく言っただけ。

その場のノリで言ったとか、君なら死んでもいいと思っただね、なんて口が裂けても言えない。

期待外れの僕だけど、怒江ちゃんの期待にぐらい応えてあげたいよ。同じ過負荷だから分かるけど、怒江ちゃんも寂しかったんだろうな。人と触れあうことを期待してるし、望んでる。

そういう気持ちがあるのは、過負荷としては異常なのかもしれないけど……、やっぱり寂しいよ、孤独は。

「……………うあ……………うあ……………」

怒江ちゃんはまた泣きだしてしまった。

男が泣いても気持ち悪いだけなのに、女の子が泣くと可愛いのはなんでなんだろうね。

「補足しておくね、

僕と友達になると、結構な頻度で突発的な不幸に襲われることになる。

よく考えて答えてね」

「……………よく分からないけどお…私はずっと不幸だったから関係ない……………」

訪れるのはもっと直接的で物理的な不幸であって、彼女が考えてるような今までの不幸とは性質が違うだんろうけど

「私……………霧島くんの友達になりたい……………」

彼女は泣きながら、そう答えてくれた。

素直に嬉しい。

心配なのは、彼女が死んじゃわないかだけど　大丈夫かな？

腐らせる力があれば、車が突っ込んできてもなんとかなりそうだし。いや、その前に吹っ飛ばされそうな気もするけど。

とにかく、大丈夫ってことにしておこうかな。

「じゃあ、今度こそよろしくね、怒江ちゃん。

あと、法幸でいいよ」

彼女の手を取って再び握手する。
いや、さっきのは偶然握手になっただけなんだけどさ。

「……………う、うん！」

ほ、ほほ、ほ、法幸くん……………」

うん、面白いな、この子は。

対人慣れしてないのは僕も同じ筈なのに、どうして会話能力にここまで差があるんだか不思議だね。

僕が人と話すことをそこまで望んでなかったからかもしれない。

しばらく、楽しく虚しく雑談をしていると、怒江ちゃんはなにかを思い出したように「あ」と声を挙げると、今までの楽しげだった表情を悲しげにして、俯いてしまう。

「……………」

「どうしたの？」

怒江ちゃんにそう訊ねると……………、彼女は話し出してくれる。

「あのね……………、死んじゃうの……………」

私に触ると、可愛いわんちゃんを撫でてても可愛い猫ちゃんを抱いても……………」

みんな腐って死んじゃうの」

先程のように泣いてこそいないが、泣きだしそうな顔をして彼女は言葉を紡ぐ。

「私も、死んだ方がいいのかなあ」

同じだ、と思った。

でも、同時に彼女は生きていたいんだ、と思った。僕とは違う。

僕は、生きていたい気持ちはあるけど、死にたい気持ちの方が強い。

「怒江ちゃん。

君は死ぬ必要はない　と僕は思うよ」

「でも……、皆腐って死んじゃうんだよ？」

「手を使わなければいいんだろう？
簡単じゃないか」

僕は軽い口調でそんなことを言う^{のたま}。

手を使わずに生活することが簡単だとは到底思えないが、それだけなら目や手足が使えない障害者となんら変わらない。それに、今までも生活してきたみたいだし、なんとかなってるんだろう。

「簡単……か。

話してみても分かったけど、法幸くんはとっても軽い人だね……？」

僕の軽い励ましが効いたのか、

怒江ちゃんは俯いていた顔を上げると、僕と出会ってからやっと初めて笑ってくれた。

とっても、可愛い、幸せそうな笑みだ。

普段暗い顔をしてる人が笑うと、普通の人が笑う場合より三倍増しで嬉しく思えるね。

普通の人の子友達なんていたことないから、あくまで想像だけどさ。

「あちゃー、気付いちやった？」

そっこだよ。僕はかーなり薄っぺらい人生観を持つ、小学三年生さ」

「人生観……」。

なんでだろう？ 法幸くんが同い年とは思えないや」

それは、怒江ちゃんが幼いだけだと思うけどね。

まあ、子供っぽくない思考してるのは自覚してるけど、そこまで大人でもない。

外には見せなくても内心では、普通に傷ついて、普通に絶望して、普通に死にたがって、普通に生きたがって、普通に孤独を嫌がり、普通に友達を欲しがっている、異常なのは『期待を必ず外す体質』なだけの小学生だ。

あれ？よく考えたら、僕に友達なんて出来るわけない。

でも、出来た。なんでだ？

同類は僕が望んでいた友達じゃないからか？

そうじゃない。同類だろうとなんだだろうと、友達は友達だ。

大切に思わずにはいられない、大事に扱わずにはいられない、幸福を願ってあげずにはいられない人だ。 その結果、不幸が訪れようとも。

考えられる理由は、『期待外れ』は、人の『出会い』や『心』に作用しないってことかな。僕の過負荷は運や運命に作用するんであつ

て、人の心に作用した（洗脳してみたことになった）覚えはないので、多分正解だと思う。

僕の過負荷は確率の中で失敗がある限り、それをつかみ取る体質だ。百分の九十九の確率で成功するとしても、残りの一を引く才能だ。失敗する確率が零パーセントじゃない限り、失敗する欠点だ。

友達になるかどうかを決めるのは結局のところ、相手であって自分じゃない。『期待外れ』じゃ、干渉のしようがないわけだ。決めるのは『心』だから。

それが、人の出会いは、成功とか失敗とかそんな言葉じゃ表せないってことかな。

もしくは、僕と怒江ちゃんが出会うこと、友達に成ることは外れる余地がないぐらいに百パーセントの確率で決まっていた、とか……なんてね。もしそうだったら、怒江ちゃんが可哀そうだ。

……結論なんて出るわけもないから、とにかく『出会い』には『期待外れ』は作用しない、そういうことにしておこう。今は怒江ちゃんとお話してるわけだし。

「ねえ…、私、幸せになってもいいのかな？」

怒江ちゃんは、今度はそんなことを僕に訊いてくる。

自分で結論を出してしまえばいいのに、他人に訊くなんてよっぽど自分に自信がないのか、よっぽど受け入れたくない結論が出たか…だろうか。

強い子だよなあ…。

僕だったら、結論が出た時点ですぐに自殺するし自決するし自害する。あーでも、腐らせる程度の過負荷なら死ぬ必要もないかも。ま、

成ってみないと分からないけど。

「いいんじゃないかな。」

過負荷マイナスだろうと才人プラスだろうと、一般人ノーマルだろうと、目指す権利は誰に
だつてあるさ。 実際になれるかどうかは別として」

まず、僕はなれないだろう。

断言できる。『期待外れ』があつて、幸せの未来を期待してる限り
は、幸せになれない。

「クスクス」

……法幸くんは上げて落とすんだから……。
最後の真実は隠しておいてくれたつていいのに……」

怒江ちゃんは、僕の答えを聞くと愉快そうに笑つた。
二回の問答の間に随分と元気を取り戻したみたいだ。

「なんだ、暗くて可愛いだけの女の子だと思つたら、
結構愉快的な性格してるんじゃないか」

本当にそう思う。

面白いことは良いことだと思うから、万事OKだけどさ。

「こんなに笑つたの、笑えたの……初めて」

「ま、僕も普段はそんなに笑わないね。」

常に無口で無表情で無感動なのが僕だから」

それは、傍観状態だろうと根幹状態だろうと変わらない。

両親が死んで、自身の過負荷マイナスを自覚した時。

両親を喪^{うしな}つて、自分が元から失^{うしな}っていることに気付いた時。
あの時から、僕は色んな事に淡泊になった。

「ありがとう、法幸くん。」

私、法幸くんと友達になれてとつても幸せ」

「そう言ってくれるのは嬉しいけど……、それはこれから分かる」とじゃないかな」

「ううん。分かるよ……。」

私を普通みたいに扱ってくれる人なんていなかったから」

「んー?。」

僕は怒江ちゃんを普通に扱った覚えはないよ?

僕は怒江ちゃんを普通に過^{マイナス}負荷として扱っただけで」

「過^{マイナス}負荷^{マイナス}つて……私達みたいな才能を持った人のこと?」

「うん。僕達みたいな欠^{さいのう}点を持った屑^{くず}のこと」

「そっか。」

でも、やっぱり普通だよ。

過^{マイナス}負荷^{マイナス}とか一^{ノーマル}般とかじゃなくて、普通の女の子として扱ってくれた」

「んー?」

心当たりが本気でないです。

どの辺だ。いつだ。なんのことだ。

さっぱり分かん。まー、怒江ちゃんがそう思ってるなら無理に否

定しなくてもいつかな。

「私の才能は腐らせること……。
法幸くんの才能はどんなものなの？」

「僕の欠点さいとは

」

今は彼女、怒江ちゃんに僕の弱さを教えてあげよう。

きちんと説明してあげないと、油断してて“ピチューン！”なんて
こともあり得るのが僕の過負荷だ。

そこまで親しくならなければ大丈夫だろうけど……。大丈夫なのか
なあ？

傍観状態に切り替えても根元的なものは意味ないし……。うーん、
ま、大丈夫だろ。

楽観的に行かないとね。

怒江ちゃんは死なせたくないけど、僕にはどうしようもないしね。
近くにいるときぐらいは護ってあげたいけど…それすら出来るのか
微妙だしな。傍観状態でなら、可能かな？

彼女の幸せを願うにしても、曖昧に願うことを意識しないとなあ。
自己暗示もここ一年で慣れてきたけど、成果は微妙だし。

……精進しないとなあ。継続は力なりって言うし、続けてれば成果
も上がるだろ。

とにかく、ちょっと不安定だけど可愛くて愉快的な女の子の友達が出
来たってことで喜んでおくことにしよう。わーい、やったね。

第3失敗 「わーい」(後書き)

ちよつと話の流れが強引かも。

いつか番外編でこの時の怒江ちゃん視点を描こうと思います。

怒江ちゃんって涙脆いよね…。

球磨川に泣きつく所なんて可愛すぎて萌え死にそうだった。

つーか、怒江ちゃんって普通に可愛いよね……。

球磨川じゃないけど、外見も可愛いから、内面じゃなくて外見に萌えてるだけなんじゃないかな…、と自分を疑ってしまいます。

外見だけってのは……なんかそれは違うと思うんだよね。うん。

真の萌えは、内面と外見、どっちにも萌えることだと思っんだ。

……なんだ、ただの変態か。

第4失敗 「意外だ」

「怒江ちゃん？」

同じクラスじゃなかった筈なのに、なんで僕の隣にいるんだい？」

正直どーでもいいけど、疑問に思ったので一応訊いて置くことにする。

ちなみに、僕らのことには一般生徒は完全無視を決め込んでいる。

「ちょっと頼んだだけだよ」

あれ？なんかアグレッシブな目をしてるな。

狂氣的というか攻撃的というか、過負荷的というか。なんつーか不気味。

一体、どーいう頼み方をしたのか気になるな！。

まあ、大体予想はつくから、訊かないけどさ。

「それで、なんで僕の机とくっつけてるのかな」

「ごめんね。私、教科書忘れちゃって……」。

見せてもらえる？」

「嫌だ」

「うん、ありがとう。」

全教科忘れちゃったからどうしようかと思ってたの」

あれ？僕、断ったよね？

すっぱりきっぱり断ったよね？

もしかして聞こえなかったのかな？

しかも全教科って、絶対わざとだよな？

「断らせてもらっよ。」

怒江ちゃん「

怒江ちゃんは今度は、僕の言葉が聞こえたのか反応を示してくれた。

「……………」。

「一応聞くけど、なんで？」

なんか、めっさ怖いんですがー。

だが、めげることのない不屈の精神を持つのがこの僕である。

「いや、なんとなく」

「……………なんだ。」

だったら見せてもらってもいいよね。見せてもらっね。

答えは聞いてないから答えなくてもいいわ」

いやまあ、僕が断った理由がてきとーすぎたのはいけなかったと思うけどさ、だからって僕の意見を無視するのはどうかと思うよ？

僕が断ったのも、他人の提案に簡単に乗りたくなかったただけだし。

そんな僕の胸中を無視して、彼女は僕の右腕に自身の左腕を絡ませ
てくる。

どんなスキンシップですか、怒江ちゃん？

確かに、僕の服に手で触れるなど言ったけど、別にだから腕を絡ませようとかそんな話じゃなかった筈だ。

それとも、これが友達間におけるスキンシップなんだろうか。いや、普通に違っただろう。クラスメイトを観察もとい傍観していたから分かるが、こんな気味の悪い　と言ったら可哀そうだけど僕としては意味が分からなくてむしろ分かりたくなくて気味が悪い　スキンシップは無かった。今時の小学生なんて握手の習慣もないのが普通だ。

つまり、これは彼女なりの親愛の証なのだろう。触れあうことで、絆を示しているわけだ。

そう考えると、なんとも稚拙な行動原理で微笑ましく思えてくるが、右腕に絡まされると非常に動かしにくい。動かしにくいと、僕の利き手は右手なので結構困る。

授業がもうじき始まるので、とりあえず鉛筆が持てるようにはしておきたい。そういえば、怒江ちゃんは勉強とかどうしてるんだろう？　鉛筆とかって持ってるんだろうか？

「怒江ちゃんって鉛筆とかって使えるの？」

「使えるよ。」

でも、腐っちゃってすぐに買い換えなきゃいけないから、あんまり使わないことにしてるの」

「へえー。勉強はどうしてるの？」

「なるべく手を使わないようにしてるわ。」

私の過負荷ってお金がかかるから　」

怒江ちゃんは、何気ない所作で色んなものを腐らせちゃうからなあ。一番被害を受けてきたのは、彼女の持ち物や所有物なんだろう。可哀そうに。他の人の物になってれば良かっただろうに。

「それはそうと、腕、離してくれない？」

「離さないわ。」

だって私達、友達じゃない。

友達ならこれぐらい当たり前よ」

友達なら…ね。

お生憎様、さつき僕の中でありえない判定が下されたところなんだ。

「離してくれ。」

大丈夫。僕は怒江ちゃんから離れる気はないよ」

「…！」

う、うん……」

てきとーにそれっぽいことを言っとけば離してくれるだろうと思っ
たのだ。

普段から、こんな気障ったらしいことを言ってるわけではないので
誤解しないように。

結果は大成功。思いの他、すんなりと離してくれた。

やっぱり、不慣れな友人関係だから戸惑っているんだと思う。

今の僕は傍観状態だから、戸惑うとかそんな感情は一切ないけど、
根幹状態だったら僕もきつと戸惑うと思う。初の友人なんだしね。

怒江ちゃんと共に帰路を歩く。

驚くことに、怒江ちゃんの家は僕が住むアパートから歩いて五分ぐらいの距離にあるらしい。

ということ、怒江ちゃん家にお邪魔することになった。

なにが「ということ」「なのかわからないかもしれないが大丈夫だ、僕も分らない。

気付いたら、そういうことになっていたのだ。

恐るべし、江迎怒江。

「嬉しい。

私がお友達を家に呼べるなんて」

「怒江ちゃん家って……ゴミ屋敷とかじゃないだろうね？」

「法幸くんは一体私をどんな風に思ってるの？」

ははは、そんな風に思ってるのさ。

そこらじゅうに腐ったものが落ちてる家とかを想像してます。

でも、さすがにないか。

女の子なんだし、きっと綺麗にしてるだろう。

ちなみに、僕の家には両親の形見以外は、生活用品と電化製品ぐらいいしかない。

テレビは買ってない。必要性を感じなかったから。

新聞は読もうかなと思って取ったんだけど……、見事に最初の三日で

読まなくなった。

活字ってたくさんあるだけで読む気が無くなっちゃうんだよねー。

「じいよ」

そんなこんなで江迎怒江ちゃんの家に着いたようだ。

外観は…、うん、まあ普通の一軒家だ。

少し壁のそこらじゅうが腐りかけてること以外は普通だな。

なんともまあ安全性が怪しい家だ。

だからといって、何を思うってわけでもないけど。

「ほら、入って」

怒江ちゃんは、家の玄関を取っ手を使って開けた。あの取っ手を定期的に換えるだけで玄関が腐るのを防いでるわけだ。なんという素晴らしい工夫。

語るも涙、聞くも涙な工夫でもあるけど。

彼女に誘導されて入った家の中は…：典型的なゴミ屋敷…：ではなく、さっぱりクリーンな空間になっていた。例のごとく壁が腐りかけている所が多数あるが、それはそれ。

「本当にゴミ屋敷じゃないのか。意外だ」

本当に意外だ。

てつきり、彼女の視界は腐っているんじゃないか、とっていたから。

だから、その辺の区別がつかないんじゃないかなー、と。

「出たゴミは全部腐らせてるわ」

「へえー。」

そんな使い方もできるんなら、社会に役立てられそうな過負荷だね」

「役立てられ……?」

「それでも役立てることをしないのが過負荷なんだけども」

ただ、過負荷だったってだけで、

別に怒江ちゃんや僕は過負荷を目指してるわけじゃないけどさ。

「昨今、ゴミ問題が酷いじゃないか。不法投棄しかり産業廃棄物しかり。」

でも、怒江ちゃんの手なら、地球に優しく塵に変えられるじゃないか。

まあ、地球以外に優しくない手だけど」

そう言つて、僕は彼女の手を取る。

面白い手だ。こんなに女の子らしい細くて弱弱しい手なのに、禍々しい力を秘めている。

そう考えると、なんだかジャンプ辺りに出てきそうな設定の子だ。最後には主人公側に救われる、そんな立ち位置で。

「……………!」

怒江ちゃんは手を取られて恥ずかしそうにする。

多分、手に触れられることなんてなかったからなんだろう。お気の毒なことだ。

とりあえず、リハビリを兼ねて突発的に手に触れてあげることにしてるんだけど、自分から腕を絡ませてきた割には、他者から触れられるのは慣れてないみたいだ。

なんて自分勝手な女の子なんだろう。それも過負荷たる由縁なのかな。

とりあえず、さっさと手を離しとく。

彼女は残念そうにしたけど、そんなこと知ったこつちゃない。

僕だって残念だ。もっと女の子の手に触れていたかったぜ。……なんてね。嘘だから信じるなよ。

説明してなかったかもしれないけど、僕に彼女の過負荷『ラフ荒廃した腐花^{レシニア}』が効かないのは、僕が『腐って死にたい』と思っているからだ。また、腐らせるのも攻撃だと認識したから。

彼女だって人間だ。

いくら自分の能力だからって、100%の確率で『過負荷を当てること』もしくは『効果を作用させること』は出来ないだろう。過負荷の調子がおかしかつた、原因不明だけど過負荷が作用しなかった、そんなことが無いと言い切れるか？……言い切れないのが現実だ。彼女の過負荷が部分的作用ってこともあるんだろうけど。それとも絶対値が僕の方が上だったから……とか。全然喜べないな。

とにかく、才人^{プラス}だろうと過負荷^{マイナス}だろうと完全完璧なんて有りはしない。だったら、僕は失敗の可能性をつかみ取っちゃうわけだ。

ちなみに彼女の過負荷の呼称名は僕が考えた。

結構すぐに思いついた。才人^{プラス}と違って、過負荷^{マイナス}が能力名を考えたって鬱にしかならないけど。誰が好き好んで自分の欠点に名前を付けるんだって話さ。僕達だけだ。

ルビに英語を振ったのは、そっちの方が格好良いからだ。言葉にもしやすいし、なにより能力名っぽい。

けど、よく考えたら僕の『期待外れ』にはルビが無かった。だから、僕の過負荷にもルビを振ってみることにした。

考えた結果、『期待外れ』^{ファイリングモード}となった。

うん、格好良いぜ。惚れちゃうと見せかけて吐いちゃうな。まあ、似たようなもんだけど。

あはは。にしても誰に説明してるんだか。そりゃあ、どっかの傍観者に他ならないけどさ……。

現地の傍観者は、がんばらず気を抜いて傍観生活を送っていますよ。というか、そうだ。

二人つきりなんだし、傍観状態は止めればいいじゃん。……よし切り替えた。

「法幸くん？」

私の話聞いてる？」

「あ、ごめん全く聞いてなかった。

ちよっと世界平和について考え事をしててね」

嘘は言っていない。

僕の世界の平和について考えてたのさ。

「もー、法幸くんは仕方ないなあ」

ぷりぷりと怒る怒江ちゃんは可愛いなあ。

…ふむ。怒る怒江ちゃん。言葉にするとそうでもないけど、文面にすると面白いな。

にしても、なにを考えて彼女の両親は『怒』なんて漢字を名前に入

れたんだろう。七つの大罪にも含まれてる罪の感情だったのに。そんな字入れる人、滅多にいないだろう。僕なんて法幸だよ？『幸』って漢字がある時点で、なんだか幸せを願われてる気がするじゃん。競いあつてもしょうがないけど、名前だけでなら怒江ちゃんに勝つたね。他だと全部負けてる気がするけど。

「それで？」

僕はなにを言われたのかな？」

「私の家でご御飯食べていかない？」

法幸くんって独り暮らしなんでしょ？」

私もそうだから、一緒に食べちゃおう？」

やっぱり両親はこの家にいないんだな。

まー、当たり前か。

捨てられてないだけマシか？」

下手すると自分を腐らせる可能性を持つ子供と一緒に空間にいたくは無いよね。

はいはい、普通普通。普通すぎて反吐が出るね。

そもそも腐らせる手を持つてるなんて、一体どうやって生まれてきたんだって話だし。

もしくは僕みたいに、自我が芽生えるにつれて過負荷が成長してきたのかな？」

僕の両親は、僕の異常性に気付いてただらうに優しく接してくれたし、よく考えると最高な人格者だったな。

結論。僕の両親は超人類。

「そつだね…、お言葉に甘えようかな」

どうせ、家に帰っても、どたばたしながら炊事するだけだし。

料理本片手に傍観状態でがんばるわけだ。

傍観状態だからがんばるとかいう意思はないわけだけど。

達成感や満足感って一体どんなものなんだろうか。

唯一感じた達成感のそれに近い感情は、怒江ちゃんと友達になれた時のものかな。

だったら、きつと嬉しいんだろうな。

「うん……！」

じゃあ私をご飯作るから！

法幸くんはここで待ってて！」

君はその手で包丁や材料を握れたりするののか？

そんな疑問が湧いたけど、その辺りはあまり突っ込んで訊かないことにした。

どうやら、『荒廃した腐花』はON/OFFは効かないけど、強弱は付けられるらしいから、物を掴むことだってある程度は可能なんだろう。鉛筆もそうみたいだし。

こことは居間だ。

机にソファ。

テーブルに椅子。

テレビに電話。

床は板張り。

ソファがあるところには絨毯が敷かれてたり。

昔の僕の家のような、普通の居間だ。

所々、腐った跡があるのは御愛嬌だな。うん、プリティー
念。そこまでの境地には達してないや。 残

腐った跡があっても、腐敗臭がないのは素晴らしいね。

設置型ファブリーズが視界に何個も存在しているのを確認すると、
涙すら出てきそうだった。

とにかく、彼女の作るご飯とやらを待つといたしましょうかね。

……あ、そうだ、期待しないように傍観状態に成っておく必要があるなあ。

さっき切り替わったばっかだったのに。まあ、ご飯食べる時にまた
切り替えればいいか。

第4失敗 「意外だ」(後書き)

怒江ちゃんの口調が分かりません。

同い年なんで丁寧語は違和感あるし。

でも、怒江ちゃんって丁寧語のイメージがあるんだよなあー！。

まあ、迷走しますけど……その内キャラがつかめてくるんじゃないかなー(遠い目)。

第5失敗 「お金が欲しい」

彼女が作ったのは、オムライスだった。
味噌汁とサラダも付いている。

料理を運ぶときに見たエプロン姿の怒江ちゃんは、とっても可愛いかった。
女の子のエプロン姿が可愛いのか、怒江ちゃんが特別可愛いのかは分からないけど。

現在は、二人で椅子に座りテーブルを挟んで向かい合っている。
そして、彼女の作った料理^{もの}を食べている。

「どうかな？」

「……美味しい？」

怒江ちゃんは、照れたように微笑みながらも不安そうに訊ねてくる。
「……傷つけないように答えてあげないとな。
いや、普通に美味しいから大丈夫だろうけど。」

「うん、なんだか腐ったような味がするけど美味しいよ」
これは、サラダのことね。

「……………」

彼女は穏やかな笑みのまま静止する。
うーん、空気が凍ったな。

僕なりの素晴らしいジョークだったんだけどなー。
サラダが腐ったような味がしたのは事実だけど。
オムライスとか味噌汁はそうでもないんだけどね。

「冗談だよ。」

僕も料理するけど、僕が作るものよりは断然美味しいよ」「
これは、サラダも含めた全部の話ね。」

「そ、そう？」

それならよかったな」

僕の訂正を聞くと、怒江ちゃんは嬉しそうに微笑む。

さっきの変にプレッシャーを感じる笑みと違って、暖かさを感じる
笑みだ。

数十分程すると二人とも食事が終了する。

「それじゃ僕はもう帰るね。」

ご馳走、ありがとう」

「……………うん。」

そ、それじゃ……………」

「さよなら」

僕がそう言つと、怒江ちゃんはとても悲しそうな顔をした。

そう言えば、この前も別れ際にそう言ったら悲しそうにしてたっけ。
僕としては、さっぱりした別れの挨拶で好きなんだけどなあ。

それでも、彼女がなにを期待してるのかは分かるので…、紳士として応えてあげてきますか。

「それと…、またね」

僕がそう付け加えると、彼女は悲しげな表情から一転して嬉しそうになった。

なんとも分かりやすい子だ。

小学三年生ならこのぐらいで、普通なのかもしれないけど。

「…う、うん！」

…ま、またね！」

……………。

再会の約束も悪くないかもしれない、と思った。
でも、あまり期待するわけにはいかない。

根元的なものになってしまうと、傍観状態になっても会えなくなるかもしれないから。

人の出会いに作用しないって推測が真実なら、要らない心配だろうけど。

あんまり、自分に都合の良い推測は信じられないんだよね。認識が曖昧かはつきりしてるかで、効力が違うってことも最近分かってきたし。

まあ、大丈夫かな。いざとなったら、怒江ちゃんに会わないように意識して直感に身を任せて歩けばいい。そしたら、偶然、彼女に会えることだろう。

別にそこまでして会いたいわけでもないから、そんなことはしないだろうけど。

一瞬でもそんなことを考えるほどには、僕は彼女を気に入っちゃってるみたいだ。

もしかしたら、初めての友達で、両親以来の人との触れ合いだったからってだけかもしれないけど。でも、僕の場合、本当に気に入ってるなら彼女から遠ざかるべきなんだよな！。

その矛盾について考えると、なんだか自分のことが分からなくなっ
ていく。

傍観状態になってしまえば、こんなこと考えることはなくなるんだ
けど。

もう少しだけ考えていたくて……、根幹状態のまま家に帰ることに
した。

家に着いた。

考えた結果、結論は“僕の心はレアメタル”というものだった。

……まるで意味が分からない。さすが僕だ。

どうしてこの結論に至ったか覚えてないけど……うん、さすが僕だ。

僕こと霧島法幸は、怒江ちゃんの家で夕飯を頂いた翌日も何も変わらず元気に起床した。

平和な朝、小鳥さえずる気持ちの良い朝である。まあ友達が出来たくらいで、何も変わるはずがないか。

そんなことを思っでご飯を食べていると、家のチャイムが鳴った。

「誰だろ？」

……………といつても、予想できてしまう不思議。

そうか、僕は予知能力者だったんだ！やったね！」

……………無いな。

現実はその甘くない。まあ、予知なんて出来ても嬉しくないけど。どうせなら、念動力とかの方がいい。

そしたら、スカートだってめくり放題だぜ。げへへ。

……………だめだ。一体僕はどんなキャラを目指してるのか分からなくなってきた。

今度自分探しの旅に出ることにしようかな。

でも、変態な自分を見つけるのが怖いからやっぱり却下。

過^{マイナス}負^{マイナス}荷^{マイナス}は過^{マイナス}負^{マイナス}荷^{マイナス}でも変態には成りたくない。

「さて、どちらさまでしょうかー」

そんなことを呟きながら僕が玄関を開けると、予想通りそこには最近友達になったばかりの女の子が立っていた。

「え、えと、私だけど。」

法幸くん……………、一緒に学校行かない？」

「別にいいけど。」

今、朝ごはん食べてるから中で待っていてくれるかな？」

「……………うん」

そう言っつて、怒江ちゃんを中にあげる。

二回目の怒江ちゃん訪問の時間である。

ちなみに、一回目の訪問から三日経っている。

それにしても、インターフォンをどうやって押したのか。

腐った跡はないし、手は使ってないだろうし、……………肘とかで押したんだろうか。

でも身長的にインターフォンを肘で押すのは難しい。

僕もそうだけど、手を少し伸ばして届くぐらいの高さにあるからね。肘で押すのはなかなか難しいだろう。

一体どうやって押したんだろう？

謎は深まる。明日も来るんだったら隠れて見てみよう。

怒江ちゃんは家に入ると、きよろきよろと見回し、自分が腐らせた壁の残骸を見ると申し訳なさそうにしょぼーんと落ち込んだ。うん和む。

残骸っつていうのは腐りかけたけど残った壁のことだ。

腐り落ちた残骸部分は全部ゴミとして処理したので、そこまで汚くは無い。

大家さんにはれないかが心配だけど、まあこの大家さんは不真面目でこちらから何も言わない限りは一年に一度ぐらいしか部屋の状況を訊ねてこないのが問題ない。

それに、見つかったも……………、どうしようか。

その時のことはその時考えよう。人生とはそういうものだと思う。

決して面倒臭くなつたからではない。

僕は貧乏ではないが、裕福でも無い。

金を要求されたら普通に大変だ。

でも、住人に壁を腐らされて金を請求しなかつたら逆に大家さんの頭が大変だ。

怒江ちゃんは割と裕福な家庭の生まれなようであまりお金に困って無いようだけど、僕の場合、今でこそ困って無いが未来で困ることになる。

だからと言つて、壁の代金を怒江ちゃんに払わせるのみなにか違つ気がする。

そんなの紳士的じゃない。

ということで、お金が欲しい。

どうにかして、お金が欲しい。

つまり、お金が欲しい。

そんなこんなで朝食を食べ終わると、適当に食器類を台所で水につけておく。

さて、学校に行きますか。

通学路を怒江ちゃんと共に歩く。

そつだ怒江ちゃんならなにか思いつくかもしれない。

少し訊いてみよう。

「怒江ちゃん。

実は僕には欲しいものがあるんだ」

「なにが欲しいの？」

「お金」

「お金？」

いきなりどうしたの？法幸くん？」

「なにか僕がお金を集める方法、思いつかないかな？」

怒江ちゃんは僕がそう訊ねると、少し考えるように視線を彷徨わせる。

「……………えーと、

私、法幸くん能力を聞いたときに思ったんだけど…！？」

僕の質問に答えようとしてくれていた怒江ちゃんが驚いたようにある方向を見た。

僕がそつちを見てみると、一台の乗用車が僕達の方へと突っ込んできていた。

あらら。やっと、初回の不幸遭遇だね。

もしかしたら既に怒江ちゃんは出会ってたかもしれないけど。

怒江ちゃんが両手を前に突き出して突っ込んでくる車を腐らせようとするけどそれを遮るようにして前に出る。

「法幸くん、なにを…！？」

慌てたように怒江ちゃんが僕を見るが無視する。

というか、僕の『期待外れ』について説明した筈なのに、理解しなかったのかな、それとも信じてなかったのか。なんだかそれは、

寂しいな。

乗用車は僕に迫ると同時に急に不自然にスピンして進路を変え、近くの塀に突っ込んだ。
僕はその光景を横目で見て、驚く怒江ちゃんを「さあ、行こうか」と促して再び歩きだす。

「それで？」

怒江ちゃんが思ったことって？」

「うん。あのね。

法幸くんが宝くじとかをやるとどうなるのかな、って…不思議に思っただけど」

「宝くじかー。そうだね……。

当たろうと思って買えば外れる。

外そうと思って買えば当たる、そんな感じかな」

もっとも表面的に外そうと思って買ったとしても、根元的には当たって欲しいという思いがあるから、どうなるのかは微妙である。自己暗示は成果が微妙なのだ。

でも、良い案だと思った。

僕の推測では、高くもなく低くもないそんな金額なら当てられる。これで、僕は億万長者とまではいかなくても平均水準よりは懐経済が豊かな小学生となれることだろう。
アパートの壁も弁償出来る。

「うん、ありがとう。怒江ちゃん。

今度試してみるよ」

「……………うん。」

法幸くんの役に立てたなら良かった」

なぜか顔を赤らめて怒江ちゃんは、そう言う。

今思ったんだが、もしかしてこの子は僕に惚れてるんじゃないだろうか？……………無いか。

ちよつと優しく紳士的に接しただけで惚れるとか、そんなマンガみたいなことありえない。しかも僕に…無いな。

ありえたら気持ちが悪い。正直、引く。

それに小学三年生だし、そんな気持ちも分からない時期だろう。

だったらなんで僕は分かるんだ、と疑問に思うかもしれないけど、

僕はこう見えて勉強熱心だから、少しだけ一般的な小学生よりは物知りなのだ。

というより、人三倍勉強しないと普通ノーマルにすらついていけないのだ。

そう聞くと、僕が結構な努力家に見えるかもしれないがそれは違う。

勉強するのは傍観状態モトの僕なので、『努力』ではないのだ。

僕の持論だが、『努力』というものは、上達意識や向上意識、そういうものがあつて初めて“様々な工程”は『努力』になるんだと思う。そういう意識が無い場合の『努力』は、ただの結果までの工程を踏む作業に過ぎない。

「それと、怒江ちゃん。

迫ってくる車を直接腐らせるのは危険だよ。

足下の道路を腐らせるとか、そんな風にして対処した方がいい」

「……………あ、うん。」

今度からそうするね」

僕の忠告を聞くと怒江ちゃんは、冷や汗をかいて返事してくれた。大方、腐らせるのが間に合わなくてもろに衝突してた未来を想像したんだと思われる。

にしても、誰かと登校するなんて初めてだな。でも、存外悪くない。

「法幸くんっ！また車っ」

そんな風に格好付けた思考をしていると、慌てたように怒江ちゃんが言葉をかけてくる。

「また？」

まあ、あまり気にしないでいいっ」

そう言つて、怒江ちゃんの手を取ると気にせず歩く。

「…！？」

怒江ちゃんが接近してくる車側にならないように誘導する。基本的に僕が車に接近すれば車がこちらに来ることはない。

「法幸くん！今度は看板が！？」

今度はなにかの御店の看板が頭上から落ちてきていた。しかも、ちょうど僕ら目掛けて。

「大丈夫」

気にせず手を引いて歩く。

強い風が吹いて、僕らの数メートル後ろにドゴツ！と音をたてて落ちる。

「あ、電柱が倒れて!?!」

今度は二柱の電柱が僕達の方へと倒れてくる。

偶然、二本の電柱がぶつかり、その下に隙間が出来た。

僕たちがそこを通ると、二柱ともすぐに倒れた。

なんだかやけに立て続けだな。

しかも簡単に避けられるタイプのものが。

僕が『悪くない、こんな登校も続けてみたいかも』、そう軽く思ったからだろうか？

そうなんだろうな！。

でも、怒江ちゃんの戸惑う姿が見れて逆に愉快かもしれない。

だからといって、こんな危険な通学路を望んだりしないけど。

僕がこういう不幸を楽しめる男だったら、逆に幸せが訪れるんだろうけどね。

「水が……!?!」

いきなり歩いていた道路から水が噴き出した。
水道管が破裂でもしたのかな？

「バイクが……！？」

バイクが転倒してスリップしてきやがった。
目前で止まった。放置。

「また車……！」

今度はトラックだった。
またですか、そーですか。
中の人も大変ですね、そーですね。
でも心配したりはしませんけどね。
車は僕としては対処が楽だけど、周りとしては一番被害が大きいかもな。
グッドラックとしかいいようがない。

「地面が……！？」

なぜかいきなり地割れが起こって落ちそうになった。
さすがに危険だ。

あたふたする怒江ちゃんもなかなか面白かったし、一般人が可哀そ
うだし、ここら辺で止めておこう。
傍観状態に移行移行っと。

といっても、もう学校に着くんだけど。

怒江ちゃんと繋いだ手は離さないまま、学校へと向かった。

僕らが歩いていた通学路は悲惨な状況になっている。

多分、明日は違う通学路になるだろう。

「怖くなかった？」

怒江ちゃんが一人の時も今日みたいになるだろうから気を付けてね
？」

と怒江ちゃんに言うと、

「ふふ。愛の試練だね……」

なんだか燃えるような目をして、気合い十分って感じになっていた。
『オラ、すっげえワクワクすっぞ！』みたいな感じである。

まあ、僕の友“愛”の所為ではあるけどさ。
なんか違うような……。

ま、どーでもいっか。

第5失敗 「お金が欲しい」(後書き)

天の道を往かず、総てを司らない男。霧島法幸。

僕が望めば運命は絶えず僕に敵対する。

っっていう台詞を入れたかったけど、却下。

仮面ライダーカブト知ってる人ってどのぐらいいるんだろう？

にしても傍観状態と根幹状態の区別の仕方が分からん。

微妙な違いを分かってもらっつかないかも。

むしろ、要らなかつたか？と思案中。

でも普通に生活するためには必要なんですよ、傍観状態が。

第6失敗 『ばれなきやいい』

怒江ちゃんと友達に成って数年が経ち、
僕はもうすぐ小学校を卒業する。

「怒江ちゃんはどこの中学に行く気なのかな？」

「私…？」

私は、えーと……、そうだ！

ほ、法幸くんはどこに行くの？」

「僕は、箱舟中学ってところに行くことになってるけど」

「えと、奇遇だね。」

私もその学校に行くことになってたんだ」

「へえ。そうなんだ。」

それは嬉しいね 多分」

実際のところ、怒江ちゃんが僕と同じ中学に通うことになるのは大分分かっていたし、だんだんと怒江ちゃんが僕に依存し始めているのは気付いていた。

それでも、僕には彼女の依存意識をどうにかすることなど出来なかつたし、しようもしなかつた。

なるべく自分の意志で判断するように言ってきたけど、僕が近くにいると結局彼女は僕に判断を委ねてしまう。といっても、僕の判断とか意思とかを完全無視して行動されることもあるので、全てがそうってわけでもないんだけど。怒江ちゃんの暴走っぷりは果てしない、とだけ言っておく。

僕と怒江ちゃんの関係は、ずっと変わらず、生温い友情って感じで、割と居心地が良かったのも事実だ。生温い友情。

なんていうか、過負荷らしいっちゃあ、過負荷らしいよなー。

そんなこんなで小学校を卒業。

特に思うことも無いので省略する。

箱舟中学への入学である。

黒神めだかつていう、圧倒的なプラスを感じる子が新入生代表をし

ていた。

そして、球磨川禊っていう圧倒的なマイナスを感じる男が生徒会長として挨拶をしていた。

プラスとかマイナスとかなに言ってるんだこいつ？と思う人もいるかもしれないが、感じるし分かるんだから仕方が無い。

過負荷とその他がすぐに見分けられるように、エリートプラスとその他もノーマル見分けることは簡単だ。

突出した者と差引かれた者。その差は大きく、二つは対極的に似ている。

入学式で見た二人を見てそんな風に思った。

異常性と過負荷か……。

ま、過負荷が過負荷であることに才能なんて関係ないんだけど。

中学に入学する前に、数人のプラスとマイナスに出会ってきたけど、結局は人格と影響の問題だ。

悪い奴はマイナスで、良い奴はプラスなんだろう。

だったら、善良な僕と怒江ちゃんはなんなんだったって話だけど。

最近、僕はともかく怒江ちゃんが過負荷なのか疑問に思えてきた。

たまにドジして、色んな物を腐らせるところを見た限りじゃあマイナスなんだろうけど……なんか腑に落ちない。

この欠点が無ければ、僕らは普通なのになあ。

それにしても、黒神めだかに球磨川禊ね……。

なんか、仲悪そうな二人だよな。同族嫌悪みたいな感じで。

その内、どっちかが学園から追い出されるような喧嘩を始めそうだな。勿論、それは球磨川先輩がナニかマイナス的なことをした結果なん

だろうけど。

入学式も終わって、授業が始まるのは明日から。
今日はもう帰宅である。

さっさと帰りますか、と怒江ちゃんと一緒に帰ろうとしていたら
前を球磨川先輩に立ち塞がられた。

『きみたち、僕と同じだろう？』

法幸ちゃんに、怒江ちゃん

僕と友達にならないかい？』

「どうして私達の名前を……」

怒江ちゃんが驚いたように、球磨川先輩を見る。

『おいおい、僕はこれでも生徒会長だぜ。』

新入生含めて全校生徒の顔と名前は覚えてるさ』

「それ、嘘ですよね」

この人がそんな真つ当なことしてるわけない。

どーせ、僕らがマイナスだって分かったから調べただけだな。

『よく分かったね。』

きみたちのことを少し調べただけだよ』

やっぱりか。

『僕、この学校で一生懸命生徒会長やってるんだけど、
生徒の皆からは人望なくてさ。』

だからとっても悲しくて寂しくて泣きそうなんだよねえ』

「そうなんですか……」

怒江ちゃんは、球磨川先輩の言ってることを信じたのか同情している。

いや、前半はともかく後半はどー考えても嘘でしょうよ。

「あなたに人望があつたら世界は滅びますね」

『法幸ちゃんはひどいこと言うなあ。』

それになんだいその無機質な目は。安心院さんみたいな目をしてる
『よ』

「へえー。その安心院さんってのは人を平等に見ているようですね」

ずっと傍観モードみたいな人がいるとは思えないから、つまりは人を客観視してるってことだと思う。

その平等さの基準は知らないけど。

『あーそうなのかもしれないなあ。』

だからこんな僕にも優しくしてくれるんだね』

訂正。

どうやら、この先輩を^{マイナス}普通等と同じように接するということは、その平等さは、圧倒的に低い基準のようだ。

自分が物凄い高みにいるか、自分が物凄い低さにいるか、のどちらかなんだろうなあ。

僕の場合、断然後者なんだけど。

そんな風に独白していると、またもや登場人物が増えた。

「おいおい、球磨川くん。

“こんな僕”なんてそう卑下するものではないよ。

支持率0%で生徒会長になった奴なんて君ぐらいだよ。もっと自信を持つんだ。

そして、新入生をからかうのは止めておきなさい」

『からかうなんて人聞き悪いなあ。

話の合いそうな子を見つけたから、友達になってもらおうと声をかけてただけだよ』

「へえ、そうだったんだ。

……この子少し、変わってるね」

なんだこの女性は…！

客観視なんてレベルじゃない。傍観モードのように無機質なわけでもない。

自然に全てを平等に見下している……！

この人が安心院さんって人なんだろう。

ま、僕には関係ないんだけどね。どうせ、そう会うコトもないだろうし。

「球磨川先輩の友達になるのは構いませんよ。

いつでも声をかけて下さって結構です。

では、さようならです」

「えと、球磨川先輩、さようならです」

怒江ちゃんは、球磨川先輩の絶対値の高さを感じ取ったのが畏怖を感じているようだ。
初めてなんだろうな。
自分より下の人なんて。

「あいあい。」

縁が合ったらまた会おう。

縁が無くても無理矢理会うのが僕だけだ」

面白い人。

それでいて、怖い人。負完全。

全ての過負荷を包み込むような深いマイナス。

ま、この人なら死んでもいいかもな。

喜ぶ人しかいないんじゃないだろうか。

まあ、それでも僕は知りあえば、好きになっちゃうんだろうけど。

「おいおい、僕の話は完全無視なんだね？

ひどい子だ。……別にいいけどね」

安心院って人がそう呟いていたけど、僕としてはあの人は無視の方
向でいく。

ひ弱そうだし、美人だし。

胡散臭いし。

過負荷にあの態度は、とてつもなくおかしい。

『やつほー。二人とも。』

お邪魔させてもらってるよ。

早速縁が合ったね』

家に帰ったら、中に球磨川先輩がいた。

なんであんたがいるんだ。

「勝手に家に入るなんて不法侵入ですよ」

『そんなことぐらい知ってるよ。』

ばねなきやいってのは、世界法則だろ?』

「僕たちがばらします」

『君達の言うことなんて誰も信じないさ』

「……………」

実に正論だ。

僕たちはこの辺では、災厄カップルで通っている。

カップルではないのだが、四六時中一緒にいればそういう噂になるのも仕方ないだろう。

災厄というのは、近くにいれば加害者にされる、からである。

「それで…、なにしにきたんですか球磨川先輩？」

『いやあ、お腹が減ってさあ。』

後輩の家でお昼ご飯でもご馳走になろうかと。

一回やってみたかったんだよねえ』

「はあ、……まあいいですよ。

待っていてください」

『やったー。』

さすが法幸ちゃん。物分かりがいいねえ』

そんなこんなでカップラーメンを作る。

僕たちはカップラーメンを食べながら、テーブルを前にして椅子に座っている。

『……法幸ちゃん。』

この仕打ちはひどいんじゃないかい？』

「仕方ないでしょう。」

今日の昼はカップラーメンにするって決めてたんですから」

「そうなんです……すみません」

「謝る必要はないよ、怒江ちゃん。
先回り気味に押しつけてきたこの先輩が悪いんだから」

『確かにそうなんだけど……。』

ところで、法幸ちゃんと怒江ちゃんは付き合っているのかい？』

「いえいえいえいえ！

まだ付き合ってますん！」

球磨川先輩の唐突な質問に、超絶的な否定で返す怒江ちゃん。
しかし、“まだ”ってなんだ“まだ”って。

多分一生付き合うことはないと思うぞ。
そんなことしたら君が死ぬ。

「そんな甘い関係ではないですね」

『もっと、どろっとしてねっとりした甘い関係ってこと？』

「そんなに淫美そうな関係でもないです。
すかつとして、かすつとしてるような……。そんな感じですかね」

いつでも手を離せそうな関係。

離したくはないけど、離せそうではある。

「それで、ホントのところ、なにしにきたんです、球磨川先輩？」

『別に本当になにをしにきたってわけでもないよ？

生徒会の仕事は副会長に任せて……。暇だったから親睦を深めにきた
ただだよ』

副会長に任せて……ってこの人鬼か。
いや、過負荷か。

「へえー。そうですか。」

じゃあまあ、ゲームでもしますか？」

『怒江ちゃんの手でゲームなんて出来るのかい？』

「コントローラーを一月に二回買い変えるぐらいですかね。
そっちなら結構安いですし」

「ごめんね……？」

いや、別に君が謝る必要はない。
宝くじ大作戦のおかげで結構な収入があって、
そのお金でテレビとかゲームとかその他諸々を買ったわけだし。
というか、やっぱり怒江ちゃんの過負荷は知ってるんだな……。
有名なのかもな。……腐らせる手を持つ女の子。うん、都市伝説に
なるな。

『へえー工夫してるねえ。』

じゃあ、スマブラXでもしようか。

でも、ゲームマスターと呼ばれたこの僕に勝てるかな？』

『スマブラX』をすることになった。

三十分後。

球磨川先輩は卑怯だった。

不意打ち・飛び道具上等で、アイテムとかも積極的に上手く遣ってきたけど……、物凄く弱かった。

これはゲームとは相性が悪いんだろうな…、なんだか動きがぎこちないし。

「ご愁傷様」

「同じく」

二人で球磨川先輩の方を見て、手を合わせて合唱する。

『ゲームでも負けるなんて……悔しいなあ』

落ち込んだフリをしている球磨川先輩。

ていうか、あんた初心者だろ。なぜ見栄を張った。

『でも、楽しかったよ。』

やっぱり、誰かと遊ぶのは楽しいなあ』

その後も僕らは色々した。

結構楽しかった。

中学入学と同時に、括弧付けてる割には格好良くない先輩の友人が

出来た。

僕と怒江ちゃんにとっての二人目の友人がこんな人だとは……まあいいけどさ。

でも、本当に球磨川先輩ってなに考えてるのか本当に分かんないなあ。

僕は怖いよ、この人が。

でも、一緒にいて楽しいのは怒江ちゃんと同じかも。

第6失敗 『ばれなきやいい』（後書き）

安心院さんもそうだけど、

球磨川の口調が分からない。

まあ、この小説において安心院さんは全く重要じゃないので、そこまで気にしないけど。

球磨川は過負荷のリーダーとして重要だからなあ。

なんか球磨川にしては、優しいのは法幸達が過負荷だからです。

過負荷組ツーか、仲間には結構甘いのが球磨川だと私は思ってるんでこんなになりました。

とゆーか、怒江ちゃんが空気と化す。

どーすればいいのか分かんねえ。どーにかするしかないよなあ。

第7失敗 「し苦勞様です」

「法幸ちゃん。」

これから一緒にエロ本買いに行こうぜ』

普通に授業を受けて、普通に学校が終了して、怒江ちゃんと帰ろうとしたその日。

唐突に現れた球磨川先輩はそんなことを宣のたまってきた。

咄嗟に傍觀状態から根幹状態へ切り替えると、立ち止まる。簡単な切り替えは小学生の時より可能になっている。移動していない時や、外じゃない限りはそう不幸は訪れないから問題なし。

「別にいいですけど……」

「え、いいの…？嘘よ。そんな筈ないわ。」

法幸くんはエロ本なんて興味ない筈だわ、いいえむしろ女の子に興味がない筈だわ。

法幸くんの興味は過負荷の女の子だけ、つまり私みたいな娘こだけの筈よ……」

隣にいた怒江ちゃんが一気にオーラが負の方向に一転して変化し、自分に言い聞かせるようにぶつぶつと喋り出す。うむ、不気味だ。特に、“別にいい”と僕が言った辺りからこうなった。でも、僕は悪くない。悪いのはこの先輩、これ絶対。

「怒江ちゃんがいる前で言う内容ですか？」

あと怒江ちゃん、僕にそんな嗜好の事実は無いからね」

僕も女の子には興味ある。でも、アレなのだ。

僕が関心を持って仲良くする。相手は死ぬ。

そんなことになる可能性が高いので、優しい僕は関わるうとしないだけだ。

けして、怒江ちゃんが垂れ流してるような嗜好は持ち合わせてはいない。

『怒江ちゃんがいるからこそ、言ったんだよ。』

女の子を連れてエロ本を買いに行く。

なんとも背徳感があるとは思えないかい？』

「言いたいことは分からなくもないですけど」

分かりたくはなかったが。

「ダメよダメ、エロ本なんて法幸くんにはまだ早いわ。」

あんなの法幸くんの綺麗な精神と身体を汚して侵すだけよ」

僕の精神と身体が綺麗かとはともかく、紳士であることは確かなので彼女の言うことは一理ある。

『あれ？』

もしかして法幸ちゃん、中一にもなってエロ本の一冊も読んだことがなかったりするの？』

「まあ、ないですね」

頻繁に家に怒江ちゃんという女の子が来るので買ったとしても置き場所が無いだろうし、必要性も感じたことが無い。

そもそも、そういうことに興味を持ち始めるのはこのぐらいの年代からの筈だ。

だから、僕はいたって普通といえるだろう。

『分かったよ。』

いきなり、エロ本を買いに行くのはハードルが高いかもね。

……先輩からのプレゼントとして、今度、法幸くんの通学路にエロ本を捨てておくよ。』

「そこは普通に手渡してくださいよ」

なぜあえて、道に捨てていくんだ。

僕以外の人に拾われたら、どーするんだ。

ん？これじゃあ、僕が欲しがってるみたいじゃないか？……気のせいだね、きつと。

『ジャンルはロリ』

「あえてのですか……」

僕はロリコンではないので、あまり嬉しくないな。

好きな異性のタイプとかはこれといって考えたことはないけど、ロリータではないのは確かである。

ちなみに、怒江ちゃんの垂れ流し呪詛はまだ続いているけど、僕の優秀な耳は彼女の呪詛をシャットアウトしている。ナイスだ、僕の耳。そして、僕の耳に生まれたことを後悔するがいい。ざまーみる、くくく。

『ちなみに、僕の好みだ！』

「聞いてないです！」

この人、ロリコンなのか？
なんとという過負荷だ。
いつか殺人者になるとしても性犯罪者にだけはならないように見守
ることにしよう。

『と、まあ冗談はこの辺にして。』

……エロ本は下駄箱にでも入れておくよ』

「割とまともですけど……、止めて下さい。
普通に迷惑です」

『じゃあ、机の上に』

「もつとダメです！」

迷惑なんてレベルじゃない。
ただでさえ浮いてるのに、今度は変態疑惑までかかることになる。
それは嫌だ。

『知らないのかい？』

“生きる”ていうのはね、“誰かに迷惑をかける”ってことなんだ
『よ

「なかなか哲学的な話ですけど……、言葉の使い方としては間違っ
ているかと」

きっと食物連鎖とか競争社会のようなことを指しているんだと思わ
れる。

『……そうかもね。』

ところで、実は僕、他人に迷惑をかけることが趣味なんだ」

「そうですか、また傍迷惑な趣味を持つてますね……」

『まあでも、法幸ちゃん達は他人じゃない。

いわば、他人の上位存在。友達であり、友人だ。

だから、迷惑はあまりかけたくないと思ってるんだ』

「へえ、それは嬉しいですね」

本当にそう思ってるかどうかは怪しいけど。

』というところで、今度法幸ちゃんにはヤンデレものを。

怒江ちゃんにはBLものを手渡すことにするよ」

爽やかな笑顔でそんなことを言う球磨川先輩。

おいおい、そもそも今どこで会話してると思ってるんだ。

普通に廊下である。

一般的な生徒達は、オープンなマイナス会話に気持ち悪がり、引いている。

というか、僕も引いている。

「……いや、要りませんよ。」

僕はともかく、怒江ちゃんに変な物は与えないでくださいよ」

そして、なんで僕がヤンデレものなんだ。

ヤンデレって確か、精神的に病んだ状態にありつつ他のキャラクターに愛情を表現する様(wikipediaより)って意味だったよなあ。なんか、心当たりがあるような気がしなくもないけど……やっぱりないな。その言葉を知った時に、一人の少女を思い浮かべ

てしまったけど……ないな。ないったらない。そういうことにして
おこう。そうやって人は嫌な現実から目を逸らし、嫌な大人になっ
ていくのだ。

というか、怒江ちゃんにも渡す気なのか。

しかも、ボーイズラブのものだと!?

この阿呆先輩、怒江ちゃんを腐らせる女子から腐った女子にする気
か!?

許せん所業だ。怒江ちゃんはそのまま、ピュアなままでいてもらう！
なんだか、既に手遅れ感もあるけど気にしない！

『……、怒江ちゃんは女の子だし、そうだね！。

男の僕がエロ本なんてあげるのはおかしいよね。

分かった、法幸ちゃんにだけあげることにするよ。

とりあえずは、今持ってるこの僕お勧めのロリ本を貸し

球磨川先輩はそう言って、自分の懐からなんだか怪しげな冊子を取
り出して

「うふふ

怒江ちゃんに取られて、腐らされた。

ぶつぶつと語りかけなのか独りごとなのか、よく分からない心理状
態に飛び立っていた怒江ちゃんがこちら側に戻ってきていた。

『あー！

いきなりなにをするのさ？怒江ちゃん。

折角…、僕が法幸くんをロリコンに目覚め

』

「いくら球磨川先輩でも、法幸くに勝手な性癖を目覚めさせるのは困りますう。」

それに他のジャンルならいざ知らず、ロリコンだけはダメです
付け加えるなら、胸とか身長とかのフェティシズムもですけど」

どこからか持ち出した包丁片手に球磨川先輩を見つめる怒江ちゃん。
うん、すっげー怖い。

彼女は小学五年ぐらいから包丁を持ち歩くようになったけど、似合
いすぎて怖い。

刃の方が腐りにくいつていう理由で最初は刃の方を持ってたんだけど、さすがに僕が見るに堪えなかったので柄を持つようにさせた。
というか、料理では普通に柄を持つてるのに、なんでそれ以外では
刃を持つとうとしたんだか。

『ふふふ、君の考えは分かるぜ。怒江ちゃん？
ロリには成れないし、巨乳にも貧乳にも成れない、高身長にも低身
長にも。』

だが、他の性癖に対してなら対応出来る。
そんなことを考えてるのかもしれないね。

……でも、怒江ちゃん、甘い。甘すぎるぜ』

「なにがです？」

『君はどこまでいってもヤンデレだ！』

他のタイプには成り様がない！』

「……………！？」

そ、そんなあ……」

怒江ちゃんは球磨川先輩の言葉で雷に撃たれたようにショックを受

けている。

そうか、ヤンデレの自覚は多少はあったのか。

……おっと、彼女はヤンデレなんかじゃない。少し狂氣的な暴走傾向があるだけだ。うんうん。

『君の失敗はただ一つ。』

少し依存しすぎた、それだけだ』

球磨川先輩が彼女に向けてそう告げる。

「球磨川先輩にしては……、なんてまともなことを……！」

怒江ちゃんは悔しそうにうつむいた。

確かに、まともである。

『ということ、法幸ちゃん。』

まだもう一冊あるからこつちを貸してあげよう』

と言って、球磨川先輩は懐から再び本を取り出して、渡そうとしてくる。

積極的に読みたいわけでもないが、興味が全く無いわけではないので、一応貰っておこうと思って取るうとすると、受け取るうとしていた本がパツと消えた。ん？今、何か横から飛んできたような。

カツ!!

そんな音が近くからしたので、見てみるとすぐ近くの壁に包丁で縫いとめられたエロ本があった。

表紙には小さな女の子？っぽい女性がなんだかアレな格好で映っている。

ふむふむ……、なんてタイトルだろうか

と見ながら考えていたら、

「法幸くんはこんなもの見ちゃダメよ。脳が腐っちゃうから小さい子に欲情するなんてどっかの先輩だけでいいんだよ」

怒江ちゃんは、左手で壁に刺さった包丁を抜いて、重量で落ちようとする本を右手で掴み腐らせた。

『あああー!!』

折角、法幸くんのために取り寄せた工口本だったのにー!

ダメじゃないか、他人の物を勝手に腐らせるなんて』

「わ、私がないであろうと、相手が例え球磨川先輩であろうと、法幸くんを精神を腐らすことはさせません! 法幸くんを腐らすのは私だけなんだからあー!」

ん? 殺害予告ですね分かります。

「もし工口本を渡すとしても、法幸くんに渡すものはまず私を通してもらいます!」

それ以外は全部腐らせます!」

なんだその検閲的な言い分は。マナージャー的発言でもある。

しかし、僕は嫌だぞ。怒江ちゃんの検閲をくぐり抜けた工口本を読んでアレしたとしても、怒江ちゃんに生温かい目で見られるのがオチだ。絶対嫌だ。そんなことになるぐらいならまず読まない。というか、最初からそこまで興味もないし。

『それはそれで背徳的な気もするなあ。
うん、分かったよ、今後は怒江ちゃんを通すことに
』

「ししないでください。
要りませんから。エロ本なんて。」

どーせなら、普通にジャンプとかマンガ、小説を貸してくださいよ」

『……………。
つまらないなあ、なんて思っはいいないけど』

「思ってるんですね」

『…分かったよ。
今度、なにか貸してあげよう』

「はあ、そうですか。
期待しないで待ってます」

僕の場合、期待したら外れるからな。

「マンガなら特に問題は無いですけど、破廉恥な内容のものを貸し
与えないでくださいよ」

怒江ちゃんが付け加えるように注意する。
君は僕の母親にでもなったつもりなのかい？と問いたい。

『その点は大丈夫さ。
僕は友情・努力・勝利という言葉が大好きな、少年ジャンプ愛読者
だからね』

ふむ、似合わない。

まあ、僕もジャンプは毎週購読しているからなんとも言えないんだが。

でも、過負荷には、特にこの先輩には似合わないと思う。

『ぬるい友情・無駄な努力・虚しい勝利、それが僕が抱えるモットーだよ。』

勿論、ジャンプをリスペクトして考えたんだぜ』

きっとジャンプもこの人にだけはリスペクトして欲しくなかったに違いない。

しかし、上手い。

ぬるい友情、無駄な努力、虚しい勝利。

過負荷の人間には相応しい三つの言葉に思える。

怒江ちゃんや球磨川先輩との関係は、ぬるい友情と言えるだろう。僕の努力（という名の工程を踏む作業）は、虚しい努力とは微妙に違うかもしれないけど結局のところは無駄である。達成感も満足感を味わえないんだから。

僕が勝利してもそれは失敗の結果。つまり、虚しいと言える。ということ、僕はその三つを正しく満たしていると言える。

これで、僕も球磨川先輩の仲間になる資格があるわけだ。うん、全然嬉しくない。

まあいいや、今日はもうさっさと家に帰ろう。

いきなり廊下でエロ本の話をし出すような変態な先輩と、あくまで紳士である僕では話が噛み合わない。

というか、この先輩と話が噛み合う奴がいたら、気を付ける。そいつも変態だ、ということ間違いなしである。

傍観状態に切り替えると、先輩と別れの挨拶をして怒江ちゃんと帰路についた。

その道なりにエロ本が多数落ちていて、僕が目を向ける度に怒江ちゃんも焦ったように触れて腐らせていた。

御苦労さまです。

そう思った。

第7失敗 「ご苦労様です」（後書き）

あれ、おかしいな。

エロ本話は最初に切り上げて、蝶ヶ崎とか志布志とかを登場させようと思ったのに、始終エロ本話をして終わった。なんということでしょう。

でも、この回では、怒江ちゃんの空気化は防げた気がするのでよしとする。

にしても、蝶ヶ崎と志布志って・十三組以前にも球磨川と交流があったんだろうか？…あつたつてことにしよう。蝶ヶ崎は結構好きなきャラなんですよねえ。なんつーか、ある意味じゃ突き抜けた過負荷じゃないですか。球磨川や志布志が他人に対してのマイナスだとしたら、蝶ヶ崎や法幸は自分に対してのマイナス。押しつける能力つてのはすごいと思うけど、ずっと押しつけてきて自分には何も無いのに、あそこまで自我を保って生きてられることが一番すごいと思う。

基本的に作中に登場する過負荷の面々つて、メンタルが弱いのか強いのかどっちなんだよって感じですよ。というより、心が壊れるのを防ぐために過負荷になったといえるのかな。そんな感じのコト原作に描いてあつた気もするし。

でも、そう考えると球磨川くんはやっぱり強いね。彼は、自分の意志で過負荷になった節があるし。

その点、法幸くんはマジ豆腐メンタルかもしれませぬ。

『期待外れ』を知ると即座に自分が死ぬことを期待しましたからね。

…あとがき少し長くなったな。ま、気にするな。

第8失敗 『皆仲良くするように』

箱舟中学に入学して初めての土曜日。休日。

家で怒江ちゃんところごろしているとお客さんがやってきた。ぼーとアニメを見ている怒江ちゃんを放置して、玄関に向かう。

「なんか最近こんなばつかな気がするなあ……」

こんなん〓唐突の登場、来訪。

つまりは、球磨川禊先輩である。

あの人は、いきなり現れるのでビビリの僕には、全くもって迷惑な先輩だ。

心臓が止まったらどうする!?!?!?!?! 要らない心配の気もするけど。

玄関を開けると、球磨川先輩とその他二人がいた。

「やあ、法幸ちゃん。」

今日は、僕の愉快的仲間達を連れてきたよ」

「別に愉快ではないですけどね」

左目に片眼鏡モノクルを付けた、理知的そうな男。

なぜか執事服を着ている。

「ケツ！ あたしらは愉快じゃなく不愉快の方だよな」

金髪のなんというか…、スケ番という言葉が似合いそうな女。どこかの学校のセーラー服（多少改造されてる）を着ている。

『いやいや、二人は十分愉快だよ。自信を持っていい。きつと君たちならお笑い界でもやっていけるぞ』

「球磨川先輩。」

私達はお笑いコンビを結成した覚えはありません」

「で、このいかにも普通そうな男があたしらと同類だったか？」

スケ番さんが僕の顔や身体をじろじろと値踏みするように見てくる。

仕方ないから、僕も同じようにじろじろと舐めるように見てやる。うむ、なんか胸が大きい。

「それで球磨川先輩。」

なんです、この失礼な人とモノクルさんは？」

『いやあ、折角友達になったことだし、僕の友達を紹介しておこうかなあと。』

きつと、君とは長い付き合いになるだろうしねえ』

「長い付き合い？」

それは遠慮したいところですけど」

『つれないなあ』

「おい、お前」

「はい？」

スケ番さんに声をかけられたのでそちらを向くと、同時に目に入ったのは木製のバットだった。

「うわっ」

いきなり視界に広がったバットにびっくりしたが、それは僕には当たらず軌道がそれて床に当たった。

玄関の床が少しへこむ。なんとという破損。

またもや、修理に金がかかりそうだ。ちなみに、腐った壁の件は一応解決している。

そして、どうやら見たところバットを振りかぶって来たのは、スケ番さんらしい。

バットが当たらなくて、不思議と不機嫌を織り交ぜたような表情をしている。

というか、そのバットをどこから出したんだと問いたい。

怒江ちゃん肉切り包丁といい、スケ番さんのバットといい、どんな仕組みなんだそれ。教えてくれ。

「……どうやら今のが彼の過負荷のようですね」

「ちっ。挨拶代わりに、一発殴ってやろうとしたっのに」

挨拶代わり。

そんな理由で僕はバットで殴られそうになっていたのか？

その挨拶は、どこかの業界ではご褒美なんだぞ！？

分かっているんだろうか、その危険性に。……我ながら分かりたくない。

『法幸ちゃんの過負荷は「期待外れ」ファイリングモードって言うてね。自身の期待を必ず外す能力さ』

「球磨川先輩に教えた覚えはないんですけど？」

『人の欠点ぐらい、見れば分かるよ。』

人の良いところを見つけてるのが得意な人っているだろう？

僕は、あれの逆タイプだね』

つまり嫌な人か。

「しかし、どうやら球磨川先輩の言った通りほんとに私達と同類のようですね。」

私達相手に何も感じてないようですし。

……それにしても、『期待外れ』ですか。

あなたも厄介なモノを抱えていますね。同情します」

お、このモノクルさん結構普通っぽいぞ？

過負荷であることは分かるけど。

「確かになあー、よく見てみるとなんか誰よりも不幸してますう
くって感じの表情かおだもんな」

え？そんな顔してるの僕？

「そんな表情かおしてますか？」

思わず訊き返す。

「「してるな」

「してますね」
『してるね』

三人ともに頷かれた。
少しシヨック。

もしかして、怒江ちゃんからもそんな風に思われてたのかもしれないと思うとなんか嫌だな。

……… 事実だから何とも言えないけど。

というか、過負荷はきつと自分が不幸であること、最低であることに自信を持つてて普通なんだと思う。

だからこそ、自分以下の球磨川先輩みたいな『最低』の人を見ると安心感や憧れに近いものを持つことになる。

噂で聞いたが、球磨川先輩って破壊臣とやらを使って気に入らない人を襲わせてるらしい。僕の想像よりはやってることが普通だったが、きつと暇つぶし程度の気持ちでやってるんだと思う。本腰を入れたらもっとえげつないに違いない。とゆうか、破壊臣って人もつまらないことやってるなあ。もっと自由に生きればいいのにさ。

「まあいいです。

どうぞ、お入りください」

『うむ、苦しゅうない』

「球磨川先輩は入らないでください」

『あ、え、ちよっ』

球磨川先輩だけ外に押しつけてドアを閉めて鍵を締める。
調子に乗りすぎなのさこの人は。

「さて、ではスケ番さんにモノクルさん。
居間に案内します」

といつても、僕の家には居間こまと僕の部屋しかないんだが。しかも、数年前に壁を腐らされてその二つの部屋も、ほとんど一つの部屋と化した。どうせなので、残っていた部分も綺麗に腐らせてもらった。あとは、小さなトイレとかお風呂とかがあるぐらいである。

「スケ番さん”に”モノクルさん”？

……怒るべきなのか？ どうなんだよ蝶ヶ崎？」

「私に聞かないでくださいよ。

特徴を言ってるだけで悪口ではないんじゃないんですか？」

「バカかお前。

そんなの事実を言ってるだけだから、って言い訳するパターンと同じじゃねえか」

「そうですけど……」

うーん、しまった。

つい、心の内で呼んでいた呼称で呼んでしまったぜ。

その所為でなぜか客人二人に論争させてしまっている。
ま、いつか。

「あ、法幸くん。

……お客さん？」

『やつほー、法幸ちゃん。』

ひどいじゃないか、僕一人仲間外れにするなんてさ』

そこには、ソファに寄りかかって退屈そうにアニメを見ていた怒江ちゃんと、隣に座る球磨川先輩の姿が……！
なんであんたがここにいる！？

……ん、なんか前にも似たようなことを思った気がする。

「あなたは本当に神出鬼没ですね。

……で、どこから入ったんです？」

『ベランダからだね』

と言ってベランダの方を指さす球磨川先輩。

「……、三階なんですけど……」

『関係ないよ。』

僕は、子供の頃に習得した舞空術を使ったからね。
筋斗雲に乗っても良かったんだけどさ』

「あ？ 球磨川さんはやつぱすげーな。

でも、実はあたしも気円斬ぐらいなら使えるぜ」

「そうだったんですか。

まあ、実を言えば、私も超サイヤ人化スーパなら出来ますけどね」

「なんでいきなり嘘で対抗し始めたんだこの人達」

というか球磨川先輩が“舞空術が使える”云々はともかく、“筋斗雲に乗れる”ってのはどう考えてもダウトだ。

「わ、私もかめはめ波ぐらいなら」

「怒江ちゃんは混ざらなくていいから！」

「そ、そう……」

しよぼーんと成る怒江ちゃんは、見ていてとても和む。

怒江ちゃんは癒しキャラ。異論は認めない。

『ということ、僕の友達です。』

着てる服からも分かるだろうけど、僕らとは違う学校に通ってるよ。互いを知る為に、まずは自己紹介をしよう。それじゃ、僕から』

球磨川先輩はそう言って語り始める。

『僕は球磨川楔。』

三年生で、この中では一番歳上だね。

だからといって別にため口でもなんでも僕は気にしないし、好きに呼んでくれて構わないよ。

趣味は他人を不幸にすることで、好きなモノは週刊少年ジャンプ。

嫌いなモノは、プラス幸せだね』

真っ向からのマイナス紹介だな。

この人は、一体どうして生きていられるんだろうか。

「アタシは志布志飛沫ししづき。

一応一年生だ。

趣味は他人を傷つけること。

好きな物は血肉、もしくはそれに類するもの。

嫌いな人間は、調子に乗ってる奴、うざい奴、エリートだな」

志布志さんね。……同学年だったのか。だったら、やっぱり“さん付け”せずに志布志でいいかな。うん、そうしよう。

それにしても、さりげなく言ってることが怖い。

球磨川先輩もだけど、危険思想を持ちすぎたる常考。

「私は蝶ヶ崎蛾々丸ちよつがさき ががまるです。

二年生ですね。

趣味は……特に無いですし、好きな物も特には無いですね。

嫌いな人間は、志布志さんと大体同じです」

蝶ヶ崎先輩か。

この人は一番マシそうだ……。

そう思ってた時期が僕にもありました……そんな風にならないといけど。

『よし、僕らは紹介を終えた。

それじゃあ、法幸ちゃん達もどうぞー』

「えと……、じゃあ私から。

私は江迎怒江。

一年生です。

趣味は法幸くんと一緒にいること。

好きなモノは法幸くんで、嫌いなモノは法幸くんの敵です」

……ノークコメントで。

球磨川先輩は微笑ましげに見てるけど、志布志さんや蝶ヶ崎先輩は普通に引いてる。

…つと、僕の番か。

「僕は、霧島法幸。

一年生ですね。

趣味は……、読書、ゲーム、ネット、その他諸々。

好きなモノは両親で、嫌いな物はトラックと……、過負荷ですね」

趣味は色々ありすぎる気もするけど、全部中途半端だ。

夢中にはならないし、なれない。

「おいおい、最後の^{アタシが}を過負荷の前で言うのかよ？」

志布志が追求してくるけど、事実なんだからどうしようもない。

「本心です」

「ふーん。…ま、いいけどよ」

志布志は大人しく引き下がってくれた。

結局過負荷とはそういうものだ。

どこまでも自分好きで自分嫌い。

過負荷を使う度、自身の欠点を見せつけられる。

『「友達の友達は友達」ってプラスが唱えた言葉がある。

これはマイナスにも適用されるんだ。というかむしろ、基本的に友達の少ないマイナス向けの言葉だ。

なので、皆仲良くするように。

同じ過負荷同士、助け合って足を引っ張り合っていないかね』

なんでこの人が良いことを言うと、一気に胡散臭く聞こえるんだろうか。……嘘つきだからか。

「つ、つまり志布志さんと蝶ヶ崎先輩ともお、お友達ってことですか……？」

『そういうことだね』

怒江ちゃんのおどおどした問いに答える球磨川先輩。

怒江ちゃんは友達が増えることが嬉しいのか驚きなのか、啞然としている。

多分、嬉しいんだと思うけど。

「はあ。なにか釈然としませんが、交友関係が広がることは悪くないですね」

そんな風に僕は呟く。

どこの学校の人達なのか知らないけど、他校の人ならどーせ滅多に会うこともないだろう。

なぜなら、僕は、そして怒江ちゃんは基本的に家から出ないのだからっ……！

ん？…家に押し掛けられたらお終いじゃね？
あー、引越そうかな。…勿論しないけど。

過負荷だから、友達になっても問題はない。

それでも、過負荷だからこそあんまり嬉しくないんだよね。

可愛い女の子だったら僕も男だし嬉しいんだけど、残念ながら友達に成るのは、クールな印象のモノクル先輩と、露出高めの古典的なスケ番さんだからなあ……。あんまり嬉しくない。

しかも、球磨川先輩の友達としてやっていけてたってことで、すごい人格歪んでそうだし。

つまりなにが言いたいかというと、相手にするのが疲れそうということである。特にスケ番さんもと志布志。

一応、紳士としてよろしくとくけど。

「それじゃ、よろしく」

「よろしくお願いしますー！」

僕と怒江ちゃんが声を揃えるように言う。

「チツ。ま、苛めないでおいてやるよ」

「はい、こちらこそ。」

それと、霧島さんに江迎さん。

志布志さんは短気ですから、接する時には気を付けて下さいね」

「お前に言われたくないけどな……」

志布志は、蝶ヶ崎先輩の方を見て呆れるように呟いていた。

よく分からないが、察するに蝶ヶ崎先輩も実は短気だったりするん

だろうか？…外れて欲しい予想である。

『蛾ヶ丸ちゃんに飛沫ちゃん、暇になったらここに遊びに来ると良いよ。』

ここにはゲームもあるし、ネットも出来るし、マンガもある。少年ジャンプもある。正に天国だ』

「いや、僕の家だ」

天国ではない。

そして、なんであんたがここに来る許可を与えてるんだ。

『合鍵だつてきちんと用意してある』

「すんな！」

おもむろに懐から二個の鍵を取り出す先輩から、その鍵を奪いながらつつこむ。

思わず、丁寧語が抜けていたが気にしない。

「ま、暇だつたら来るわ」

「そうですね。お邪魔するかもしれません」

こちらを一瞥してそう答える二人。

何故二人とも思いの外乗り気なんだ！？

『不思議かい？』

僕の耳元に口を近づけてくる球磨川先輩。
内緒話というわけですか。

「ええ、まあそうですね。

なにやら、あなたに連れてこられたから仕方なく、という感じでし
たし」

『簡単だよ。彼らは過負荷故に友達が皆無。』

だから、同じ過負荷とは言え、いや、だからこそ新たな友達は大歡
迎というわけさ』

「そんなもんですか……」

『本心でどう思ってるかなんてことは、僕にも分からないけどね…
…おっと』

球磨川先輩が咄嗟にといった感じに僕から顔を離す。

同時にヒュンツと耳元を通る風切り音。

カツと壁に包丁がささる。もしかして、今これが投擲された？
見ると、怒江ちゃんが怖い笑顔でこっちを見ていた。

「男同士はダメですよお？」

ふむ、どうやら腐女子になる心配はなさそうだな。

僕は、安心して一息ついた。

第8失敗 『皆仲良くするように』（後書き）

蝶ヶ崎と志布志のキャラが掴めない。

球磨川が普通に良い先輩に見える。

怒江ちゃんがなんかアレだ。

法幸くんマジ法幸。

そんな感じですね。

とりあえず、蝶ヶ崎と志布志をどうにかしないと。

あと、選挙戦辺りをどう改変・介入するべきか……。
うーむ、迷走中です。

第9失敗 「矛盾は無い」

「よし、今からこの中で誰が一番弱いかな勝負しようぜ」

僕の家に来ていた志布志がそんなことを言いだした。皆、それぞれの反応を返す。

球磨川先輩。

『おいおい、勝負するまでもないよ。』

僕が一番弱いに決まってるじゃないか』

蝶ヶ崎先輩。

「私は別に構いませんよ。」

ただ、どのようにを勝敗を判定するのですか？」

怒江ちゃん。

「……少しやってみたいですね」

僕。

「……ないわー」

そんな感じだった。

僕としては、勝負とかしたくない。

めんどくさい。家でごろごろしてたい。

猫のぬいぐるみにひたすら猫パンチしてたい。

無意味に無為に無作為に家でひっそりと暮らしてたい。

「勝敗なんて、二人で殺し合いでもすればいいんじゃないの？」

「でも、私達は過負荷ですよ？」

その場合、勝った方が弱いのか、負けた方が弱いのか分かりません」

「そりゃあ、勝った方が強くて負けた方が弱い！

これでいいんじゃないの？

だけど、過負荷としては負けた方が上！…そういうことだろ？」

『それでいいんじゃないかな？

でも、法幸ちゃんと蛾ヶ丸ちゃんは殺し合いみたいなルール無用の戦いには向いてないよ？

二人とも、基本受け身の過負荷だからね』

「なに？ 蝶ヶ崎はともかく、霧島も『致死武器』すら効かねーのか？」

『怒江ちゃんの「荒廃した腐花」が効いてないしね。

『致死武器』もきつと効かないよ。試しにやってみたら？』

「…そうですね」

志布志がそう告げたと同時に“ブシャツ”と僕の全身から血が噴き出す。

「うわっ！？ なんだこれ！？」

身体中がズキズキして、痛い！

「なんだ効くじゃねーですか。

『霧島は初見か。それがアタシの過負荷、他人の古傷を開く『致死武器』だ』

これが志布志の過負荷！？

ひよっとしたら死ぬるんじゃないか！？死ぬたりするんじゃないか！？

このままほっとけば大量出血であの世に往っちゃうんじゃないか！？
やばい、テンション上がってきたー！

でも床に血だまりが出来てるー！やっぱ最悪だー！
それにしても痛い…。

『あ、止まった』

しまった。久々に露骨に期待しすぎたー！

「おつかしいなー。アタシはまだ発動してるんだけど。
遅れて霧島の過負荷が発動したのか？」

一応説明しておくかな。

「遅れて、というより僕の過負荷は僕が想定する攻撃じゃないと通
用しないからね。

まさかいきなり血がドバドバ出るものだとは思ってなかったから、
発動が遅れたんだよ。

それにしても、こんな能力なら唐突に、それも部屋の中で使わない
でくれないかな。

ちくしょー、掃除が大変だ。カーペットも変えないと……怒江ちゃ
ん血液だけを腐らせたりは

「出来ないわ。

ところで、この血飲んだりしても

「ダメ。そんなアブノーマルな行為はさせない」

「冗談よ。吸血鬼じゃあるまいし飲んだりしないわ」

「それならいいけど…」

怒江ちゃんはたまに平然と嘘をつくからなー、あんまり信じられない。

『ね？ 法幸ちゃんには攻撃が通じない。』

法幸ちゃんが攻撃を喰らうことを期待してる限りはね』

「仕組みを教えた覚えはないですけど」

知ったような口を聞く先輩である。

説明した覚えのないことを知られているというのは、あまり好ましくない。

『見れば分かるさ、と言いたところだけど…、今のはただの推測さ。』

……どうやら、正解だったみたいだけどね』

カマ掛けですか、そーですか。…なんて先輩だ。

「……そういえば、球磨川先輩の過負荷はなんなんですか？」

少しだけ気になって、訊ねてみる。

蝶ヶ崎先輩の過負荷は先日教えてもらった。『不慮の事故』エンカウンターという

“押しつける”能力らしい。なんでも最近、とくに僕と知り合って

からは不慮の事故に遭うのが多くなったらしい。

……とりあえず謝つといた。“どう見ても僕の所為です、すみませんでした”としか言いようがない。

常に理性的で常識的。たまに、ずれたことも言うが誤差の範囲。怒江ちゃん以外の新規で知り合った過負荷の中で、蝶ヶ崎先輩が一番僕の中で好感度が高いことは明白だ。しかも、どれだけ事故や不幸に遭つても『不慮の事故』エンカウンターで死ぬことがないというのを知ったことで、僕の蝶ヶ崎先輩に対する好感度もとい期待値は鰻登りだったりする。

死んでもいいけど、死なないならそれが一番だと思う。まあ、いつか『不慮の事故』に対する期待を外しそうで怖い気もするけど。今のところはきちんと作動しているらしい。

「そついや、アタシらも知んねーな」

「どういったものなんです？」

どうやら志布志や蝶ヶ崎先輩も知らない様子だ。

あんたら一体いつからの関係なんだ。普通、知ってるもんなんじゃないか？

『……喰らつてみるかい？』

これを刺すんだけど』

先輩は大きくて、長細い一本の螺子を手に出しながら僕に向けて言う。

その螺子からはなんとというか、禍々しくも神聖なようなオーラが出ている。

「いや、遠慮します」

先程ドクドク出した血を雑巾で掃除しながら言う。

ちなみに、身体中の傷跡は、血は既に止まっているので放置している。じりじりとした痛みは感じるが気にならない程度である。勿論、血まみれになった服は着替えた。

……とにかく、血が流れるのはもう沢山だ。

どうせ結局死ねないんだし、貧血に成って損するだけである。

『そう。ま、多分法幸ちゃんには通じないよ。』

それに、僕の過負荷これはプラスをマイナスにするものだからね』

「プラスをマイナスに…？」

どういうことだ？

つまり、強制的に過負荷にするってことかな？

『正確には、僕と同じにするんだ。』

あ、この過負荷チカラは内緒にしようとしてね。

いつか主人公ヒーローに向けて使うつもりだからさ』

球磨川先輩と“同じ”にするって……、かなり性質たちの悪い過負荷だな…。

僕の場合は、『期待外れ』が消えてマシになるのかもしれない。でも、性格もこの人っぽくなるならあんまり意味が無い気がする。ただどやっぱ、『期待外れ』が無いだけでマシな気もするなあ。うわー超複雑。

とゆうか、主人公ヒーローって……、そんな人いるのか？

いるかいないかは別として、過負荷は思いつきり悪役側だろうから言ってる意味は分かる。

球磨川先輩みたいな意味の分からない悪役を敵にするだなんて、どこかの主人公さんには同情を禁じ得ない。

「分かりました。」

拷問されない限りは言いません」

実際は、拷問されても言わないだろうけど。

「あいあい、分かっていますよ。」

能力の内容ってのはここぞって時に暴露するべきですもんねー」

「了解しました」

「わ、分かりました」

僕に続いて、志布志、蝶ヶ崎先輩、怒江ちゃんが了解の意を示す。球磨川先輩はにこにこして聞いていた。

『それじゃあ、弱さ比べはどうしようか？』

「んー、もうどうでもいいですわ。」

アタシ的には霧島を痛めつけたかっただけなんで」

「…僕って何か恨まれるようなことしたっけ？」

「いつつも常識人ぶって澄ました顔してるのがむかつく。超うぜえ」

なんかすっげー理不尽なことを言われてる気がする。

だが、否定はしない。だって、僕が一番常識的だからね！

ということ、結局弱さ比べが行われることは無かった。
ま、強い弱いってそう簡単に決められるもんじゃないしね。

数分後。

「法幸くん、血ってあんまり美味しくないね」

そう言われてそっちを向くと、ペロペロと指先を舐める怒江ちゃん。
その指先は少し赤い液体が垂れている。

お、これは少し色っぽい気がしなくも……ってしないから！

「……………飲んだことないから、分かんないかなー」

スルーすることにしよう。

触れてはいけないことがこの世界にはあるのだ。

ある日の通学路。

「法幸くん、見て見てー」

と怒江ちゃんに言われて、彼女の方を見ると両手からうねうねした“黒黒しい何か”が発生していた。辺りの空気も腐敗している感じがする。

なにそれ気持ち悪い。大体予測できるから困るが。

「えっと…、なになかな、それは？」

「えっとね、『^{ラフ・ラフレミア}荒廃した腐花』をビームみたいに打ち出せないかなあ〜ってやってたらこうなったの。手から離れないけど、遠くのものも腐らせるのはとっても簡単なの。これで法幸くんの期待にも応えるのが楽になるわ」

と言って、彼女は、彼女に向かって突撃してくる車に向けてその“黒黒しい何か（荒廃した腐花を鞭或いは触手っぽくしたものらしい）”を伸ばして腐らせる。車は前半分が腐り停止した。運転手は呆けている。あ、生きてるんだ。

「へ、へえ〜。そうなんだ〜」

色々思うところがないわけでもないが、僕はそう納得するしかないかった。

なんだか、怒江ちゃんの戦闘力が日に日に上がってる気がしてならない。

この子は一体何と戦ってるんだろう？…それは、僕の『過負荷』に他ならないのだろう。

とか考えてる間に彼女は何匹ものカラスに襲われ始めた。と思っただけ間に全て腐らせていた。うわー、結構ぐろい。つーか、あれも僕には効かないんだろっか？さすがに効きそうだけどないや、むしろ当たらないのかな。

「災厄カップルだ!？」

「やべえよ。早く離れないと…」

「!？」

「ほんとだ…やばいな…!」

「ヒイヒイ!!」

「つーか、あいつらなんで生きてるんだよ…迷惑かけてるのが分かって無いのか？」

「さつさと死ねばいいのに…」

「化け物め…くそっ」

僕らが歩道を歩くだけで、通行人は我先にと逃げていく。

コンビニや家に入ったり、道を走って行ったり、戻ったり。

車も一斉停車だ。そんなことするなら、この道通らなきゃいいと思っただけ。

なんというか、この通学路を通るようになって半月も経ってないのに、人々はきちんと学んだなあ。

やはり、人は慣れ、学ぶ生き物であるようだ。

ちなみに、通学時には傍観状態になっているから訪れる不幸も少ないけど、それでも不幸は訪れる。特に、怒江ちゃんに対してだが。

僕の傍観状態は表面的な感情は無に出来るが、根元的なモノまでごまかせない。

根幹状態の奥底で期待していることは、傍観状態になって心を無に

して客観視しても、『期待外れ』はきちんと作用するのである。僕が持つ自分に対する根幹期待は『死にたい』なのでそう死ぬような事象が訪れたりはないけど、僕が持つ怒江ちゃんに対する根幹期待は『傷つくことなく幸せに生きていて欲しい』なので、色々不幸な事象が起きるわけだ。ほんと、ご愁傷様です。

「クスクス

わたしたちが歩くと、皆消えてくれるね。

空気が読めるって素晴らしいことだと思っなあ」

嬉しそうに僕の隣を歩く怒江ちゃん。

怒江ちゃんが幸せそうだし、これでいいのかな…？

いいってことにしておこう。

僕が『怒江ちゃんの幸せ』を期待しているのに、怒江ちゃんが幸せそうなのは僕の過負荷的に矛盾しているように思えるかもしれない。でも、やっぱり矛盾は無い。

僕の思う『彼女の幸せ』に僕はいないから。

第9失敗 「矛盾は無い」（後書き）

結構、間が空いちゃった

ノルマは一週間内（更新してから七日後まで）って一応決めてたんだけど、見事に護れませんでしたー。つーか、難しいですわ。

一応、ストーリー最後の方は思い浮かんでるんだけど、それまでの過程的な話でなににするかが思いつかない……。今回の話とか、グダグダだったし。ま、てきとーにやりますけどね。

それはそうと、過負荷連中を戦わそうと思ったら、あれ？『荒廃した腐花』はともかく、『不慮の事故』とか『期待外れ』とか『致死武器』とか同士でどーやって戦わせるんだよ？ってなって、戦闘は却下に至った（笑）。基本、チートじゃねーかあいつら。

まあ、勝利を期待する勝負事で法幸くんが勝てるわけはないんだが。にしても、なんか短編二つをくつつけたみたいになってますね。

ま、気にするな。

第10失敗 『つい食べちゃった』

校舎前。

いきなり金属バトン？（武器）が僕達の方へ飛んできたと思ったら、怒江ちゃんが咄嗟に腐らせていた。

「危ないなあ。こんなもの投げつけてくるなんて…」

怒江ちゃんは、面倒くさそうにそう呟く。

僕は、またも戦闘能力の差の広がり感じた。

どうして怒江ちゃんが咄嗟に反応できたのか、不思議で仕方が無い。

金属バトンが飛んできた方を見ると、二人の生徒が立っていた。

怪我をしているのか、体中に包帯を巻いたツインテールの女子生徒に、正に不良！と言った感じの金髪の男子生徒である。

「ふむ、大丈夫だったか？ そのの者達？」

頭部も包帯巻き巻き状態で片目しか見えない程である。

そんな女子生徒が無傷の僕達に近付くと気遣ってきた。

「君こそ、大丈夫なの？ なんかすっごいボロボロだけど」

よく見ると、この子新入生代表をしていた人だ。

こつも近くで見ると、よりプラスオーラをビンビン感じる。僕達のマイナスオーラが消し飛びそうな勢いである。ちなみに、オーラ生命力が消えたら死ぬ。

「ん…？ ああ、このぐらいなんともないぞ。ともかく、今は事故だったのだ。許してやってくれるとありがたい」

「今のつて、この人が投げたんですよねえ？」

怒江ちゃんが金髪さんをじろりと見て、訊ねる。

加害者である金髪さんは、不機嫌そうに僕らの方を見ている。武器を腐らされたからだろうか？ でも、いきなり投げつけてきた金髪さんが悪いので謝ったりはしない。

「…うむ、この者は私になぜか攻撃を加えてくるのだよ。」

そして、今日はその攻撃の際に、武器が不運と不注意により手から離れ君達へと投擲されてしまったというわけだ。困ったものだ」

彼女は呆れたように言うが、攻撃を加えてくる云々はツツコマナイ方がいいのだろうか？

それとも、つつこむべきなのか。

「……？ この人、噂の破壊臣って人じゃないかなあ？」

「へ？ ……金髪に、目つき、武器…そうかもね」

破壊臣。球磨川さんの指示で色々と破壊して回る生徒会役員だった筈？

周りの観衆から、破壊臣がどーのこーのつて聞こえてきているので、怒江ちゃんの予想は正解のようだ。

「お前らが、災厄カップルってやつか…」

破壊臣さんは僕らに向けて、一言そう呟くと不機嫌そうに立ち去っていった。

僕らのコトを知っているんだろうか？ 噂かな？ それとも、球磨川先輩からかな？ ま、どうだっていいんだけどさ、そんなこと。

「災厄カップル？ 聞いたことがあるな。 貴様達のことなのか？」

「カップルじゃないんだけど…そうだね」

訊かれたので訂正とともに肯定しておく。

災厄カップル。

なんというか、テキストウかつチープさを盛大に感じる呼び名である。いや、通り名というべきか。

しかも、語呂がいいんだか悪いんだか分からない。

考えたのは、僕らじゃないのでなんとも言えないけどね。

「ふむ、まあいい。噂では、闇黒の瘴気を放ち、近付いたもの全てを問答無用で腐らせる怪物だと聞いていたが、やはり噂は噂。あてにはならんな」

やれやれ、と彼女は肩をすくめる。

噂とやらが極めて正しいことは、伝えた方がいいんだろうか？

別に伝えなくても問題ないかな……。

「私の名は黒神めだかだ。 貴様達の名はなんという？」

驚きなことに、いきなり名前を交換する展開になった。

それは別にいいんだけど、…こんなプラスの人と名前を交換してしまってもいいんだろうか。

でも、ま、友好関係にならないのなら良しとしておこうかな。

さすがに、名前を呼び会ったらそれだけで友達とかそんな超展開にはならないだろう。とゆうか、そんな展開には僕がさせない。

「僕は、霧島法幸」

「私は、江迎怒江」

僕が名前を言うと、怒江ちゃんも続けた。

とゆうか、よく考えなくてもこの人が破壊臣って人に狙われてるってことは球磨川さんの標的なワケだね。あれですか、この子を球磨川先輩は好敵手的なキャラにする気なのかな？
それはそれで面白そうだけれど。

「ふむ、貴様達は同学年のようだな」

どこを見てそう判断したのかは知りませんが、その通りでござえます。

そんな風に思っていると、黒神さんは、唐突に懐から扇を取り出して僕らにビシッと向ける。

「霧島同級生に、江迎同級生、おかしな噂が流れてるようだが、噂など気にせず胸を張って生きるとよい」

黒神さんはそう言うと扇をしまい、怪我などを感じさせないしっかりとした足取りで校舎へと入っていった。

「……………」

僕らは、唾然としてその背中を見送った。

一体、あの謎の上から視線はなんなんだろう？

そんな疑問が湧いていた。

「変な人だったね……」

「うん、そうだね……」

怒江ちゃんと共感し合い、僕らも校舎の中へと入っていった。

「ということがあったんですよー」

蝶ヶ崎先輩に、黒神めだかと遭遇したことを報告。

球磨川先輩が標的にしている人だということも。

志布志は、今日は来ていないご様子。

「そんなプラスオーラのエリートがいるのですか……」。

球磨川先輩の通う中学校なので、もっと暗い学校を想像していましたが、そうではないのですね」

「裏ではなにが行われてるか知りませんが、パツと見は普通ですよ。パツと見は」

「ですねえ。ヒドイ噂は聞きますが、噂を聞くだけです」

僕と怒江ちゃんがそう言うと、床に寝転んでジャンプを読んでいた球磨川先輩が、ジャンプから目を離さずにそのことについて教えてくれる。

「そりゃあ、さすがに大っぴらに陰惨なことは出来ないよ。」

やるんなら、ばれないように、影で裏で正々堂々見つからないように誰かを不幸にしてあげないとね」

言ってることが半分ぐらい意味不明なのは、この人の仕様なんだろうな。

多少気に成ったので訊ねておくことにする。

「実際、どんなことしてるんです？」

「特になにをしてるってわけでもないけど…、エリートを墮したり、不純異性交遊を唆したり、盗撮行為を奨励したり、苛めを肯定、とかかな？」

中学生つてのは単純でね、誰かに背中を押されると深く考えずに行動しちゃうんだ。まったく…、思考力のない若者つてのは本当に困ったものだ」

「……………」

思わず言葉に詰まる。

予想内と言えば、予想内だけど、本当に陰湿なことしてるんだなあ…。

僕は、生憎そんな光景を見たことが無いんだけど本当に行われてるんだらうか？

気になるし、今度歩きまわってみようかな。いつもは必要なところ

しか行かずに、放課後も即帰宅しちゃうわけだし。

『…なーんてね　そんなことやってないよ。僕はね、下種や外道が大嫌いなんだ！社会のマナーを守らない人や、すぐに他人に責任転嫁する人はとくにね！』

「はいはい、そーでしたね」

『あれ？　なんだか法幸ちゃんの反応が雑だ』

「霧島さんも球磨川先輩に慣れてきたのでしょうかね」

正に蝶ヶ崎先輩の言う通りである。

この人はいつつも、まるで自分が善人や一般人であるかのような言動をするのだ。もう、割と慣れてしまつて、抗議するのも面倒くさくなつてしまつた。

「それで、どうして黒神さんを苛めてるんですか？」

『別に苛めてるわけじゃないし、理由もこれと言つてないんだけどさあ。』

強いて言うなら、あの子がおてんば過ぎだからかな。あんな子、僕の愛する、平和な学校生活には必要ないんだよね』

「へえ　、でも、そう簡単には潰れないんじゃないんですか、あの人」

そう思った理由は単純明白、「なんかすっごいプラスオーラを感じた」からである。

それはもう本当に僕と云う存在が消し飛びそうなくらいにプラスオ

ーラを感じたのだ。というより、僕に無いモノを持つてるといふベ
きか……うつむ、謎。

『そうなんだよねえ。高貴ちゃんの破壊も失敗続きだし、ホント人
外だよ。なんであんな子が人間社会にいるのか、不思議で仕方が
無いよ』

僕は、どうして球磨川先輩みたいな過負荷が人間社会にいられるの
か、不思議で仕方がありませんよ。ま、この考えは、過負荷にも異
常者にも言えることなのかもしれないけれど。

「ところで、球磨川先輩。冷蔵庫にあったはずのプリンを知りませ
んか？」

と、唐突にプリンのお話をし出す蝶ヶ崎先輩。

そう言えば、冷蔵庫に『ガガマル』とサインペンで無駄に丁寧に名
前の描かれたプリンがあった気がする。どうして僕の家^の冷蔵庫に
蝶ヶ崎先輩の名前の書かれたプリンが収納されているのか、謎なの
だがそこはもう面倒なのでスルーすることにしようか、この
人達（球磨川先輩、蝶ヶ崎先輩、志布志）、余程居心地がいいのか、
都合がいいのか知らないが、僕の家^に頻繁に入り浸るのである。よ
つて、プリンどころではなく、持ちこまれた私物も当然存在するの
だ。

その中での意味不明な私物を紹介すると、血にまみれたバット（と
りあえず血を拭け）、中の綿が飛び出たアニマル人形（変なもの持
つてくん）、様々なエロ本の数々（勝手に家に隠さないでほしい）
、ドでかい螺子（どこで売ってるんだ）等と言った感じである。よ

に叩きつけた。そのまま、何度も、何度も、顔や胴体に蹴りを入れる。入れ続ける。膝蹴り、ひじ打ち、かかと落とし…その他諸々。

「し…かもつ…、美味しそう…っ…、だから…っ食べたって…、どう見ても…確信犯じゃねえかあああ！！！！」

正論の怒りを叫びながら、弱弱しく倒れた球磨川先輩を痛めつつける蝶ヶ崎先輩。

なんだこれ、なんなんだこれ。なにがどうなってあんなったんだ？思わず怒江ちゃんの方を見るが、彼女も僕と同じように困惑しているだけだった。

「とりあえず、止めさせた方がいいのかな？」

「どうなんだろう…？」

絶賛暴力を受けている最中の球磨川先輩がさすがに可哀そうなので止めに入ろうかな、と思っていると、ちょうど志布志が家にやってきたようだった。

「邪魔すんぞーっと、やっぱり蝶ヶ崎がキレたのか」

僕らが集まっていた居間にやってくるなり、SMプレイに近いものを繰り広げる二人を見て志布志は納得するように言った。やっぱりということ、外にも蝶ヶ崎先輩の怒鳴り声は響いているということなんだろう。

「えーと…、それじゃあ、専門家の志布志さん、初見の僕達に解説をおねがいします」

球磨川先輩の救出は後回しにして、先に説明をもらうことにす

る。

「蝶ヶ崎の過負荷は、『不慮エンカウンターの事故』。他人に何もかも押し付ける過負荷だ。それで、ストレスやしがらみを他人に押し付けて生きてきた結果」

「ふとした拍子に簡単にブチ切れる、そんな人間になってしまったというわけか」

「ま、そーいうことだな」

ふむ、大体分かった。しかし、プリンを喰われてキレるとは……なにが琴線に触れるのか分からないな。

「凄い変わりようだね……」

怒江ちゃんは若干怯えながら、僕の方へと寄ってくる。

確かに、なんだかキレやすい若者の代表みたいな感じで怖い。

「で、あれはどうやって止めればいい？」

力付くで止めるとか、そんなことはひ弱かつ期待外れの僕に出来るわけもなく、出来れば他の知的手段を用いたい。なので、やはり蝶ヶ崎先輩とは僕らより長い付き合いであろう、志布志に訊ねる。

「自然と気が治まるまで直らない時もあるが…、今回はアレだろ？
球磨川さんが蝶ヶ崎あいつの買っておいたプリンを無断で喰ったからだろ？」

「な、なんでそこまで知ってるんだ…？」

もしま、こ奴、ほんまもんの蝶ヶ崎先輩に対するエキスパートだと

いつのか…！

「球磨川先輩が食べるところを見てたからな」

「だったら止めるよ」

「いや、気付いた時には口付けてたし、もう遅いか、と思ってな」
「ならば仕方ない…のか？」

「ほら、新しいの買ってきたから渡して機嫌を取って来い」

と言って、志布志は今まで右手に持っていたコンビニ袋から、一個のプリンを取り出すと僕に渡してくる。準備いいな。もしかすると、それを買いに行っていたからさっきまでいなかったのかもしれない。

「あ、金は霧島が払え」

「「お金取るんだ…」」

思わず、怒江ちゃんと声が揃う。

にしても、本当に金を取るべきなのは球磨川先輩ではないのだろうか？ 後で、要求しよう。

どちらにしてもあの喧嘩？は速く止めたい。近所迷惑だし、二人の周りの器物が破損していつてるし、僕にとっても大変迷惑である。

「で、分かったか…！？ もう、人のプリンに手は出さないって誓うか？ 誓うよなあ？ 誓えよ？ 声が聞こえねえぞおお！！」

プリンの代金を志布志に払って、球磨川先輩の後頭部を靴下の履い

た足でぐりぐりと踏みつけている蝶ヶ崎先輩に近付くと、持っているプリンを見せながら語りかける。

「蝶ヶ崎先輩、ほら、新しいプリンを買ってきましたよー。お説教もそこら辺にして、もうそろそろ許してあげましょー」

落ち着かせるために、和やかな口調を意識して話す。

「ああ！？……………そう…だな…、霧島もそう言ってることだし、仕方ねえ…。この辺で許しておいてやるうじゃねえか…」

と言って、うつ伏せに倒れる球磨川先輩の背中の上に座って、僕から奪ったプリンをどこからか出したスプーンで食べ始める蝶ヶ崎先輩。

「…はあ」

その姿を見て、思わず溜息が出る。

普段理知的だったことの裏に、こんな真実があったとは…。少しシヨックである。なんというか、異常じゃないと思っていた人がやっぱり異常だった、というそんな感じのシヨックを今、感じている。そのまんまだった。

で、でも、ワイルドな蝶ヶ崎先輩もちよつと格好良いかも……………なんて思ったりしない！

ワイルドというか、理不尽で暴力的なだけじゃないか！

あんな、人間の言語力を無視した存在、僕は許さない。実のところ、家が壊されたくないだけだが。

そんな蝶ヶ崎先輩も少しづつ、気が収まりつつあるのか、髪型や顔

つき、雰囲気^が元に戻りかけつつある。
ほっとけばその内、元に戻るのだろうか……。戻ってもらわないと
困るなあ……。

第10失敗 『つい食べちゃった』（後書き）

日常話。

とりあえず更新はものすっげーおそくなるだろうが、完結はさせるつもり。

第11失敗 「心配ですよ」

ある日の夜七時頃。

怒江ちゃんは基本的に朝やってきて、朝食と一緒に食べ、学校に行き、学校から帰ってくると僕の家でくつろぎ、共に夕食を食べると去っていく。それが日常のサイクルとなっている。

「それじゃあ、またね、法幸くん」

「うん、またね、怒江ちゃん」

怒江ちゃんの帰宅時間となり、玄関先まで一緒についていく。

そこで、二人して微笑み合って別れの挨拶をすると、怒江ちゃんは僕の家から去っていった。

傍観状態に切り替えて、閉じられた玄関を無言で見ていると、後ろから声がかけられた。

『怒江ちゃんが心配かい？』

玄関から目を離して、いつの間にか背後に立っていた球磨川先輩を見る。

いつものごとく、口元に怪しげだけど爽やかな小さな笑みを浮かべて、優しい目で僕を見ていた。

「……そりゃあ、心配ですよ」

女の子が夜道を歩くのだ。心配に決まっている。

傍観状態に切り替えれば、そうだった感情すらシャットアウト出来る筈なのだが、その対象が怒江ちゃんだとなんだか上手く作動しな

い。
球磨川先輩とその愉快的仲間達や、他の人間を対象にするのなら、きちんと傍観状態は作動するのだ。

傍観状態になると思考回路がシンプルになり、期待だとか感情だとか、余計なモノは全て消し去って行動できる、善なのだが……、どうにも怒江ちゃん相手だと上手くいかない。
これまで怒江ちゃんは僕の期待に応え続けてくれている。しかし、だからこそ僕の期待はどんどん膨れ上がる。

『そんなに心配なら送ってあげれば？』

「申し出ても、なぜか断られるんです」

『…へえー』

先輩は不思議そうな顔で相槌を打った。

僕も不思議で仕方が無かった。送っていいこうとすると、どうして断られるのかよく分からない。怒江ちゃんに訊いても、曖昧に誤魔化すだけで答えてくれない。

僕がいた方が振りかかる不幸は少ない筈なのだ。しかし断れる。もしかすると、不幸以前に僕がいると逆に不幸対処に邪魔なのかもしれない。怒江ちゃんは優しく、僕が死なないと分かっている僕を盾にしたりすることはないから。

ちなみに、志布志や球磨川先輩の場合、時折僕を当たり前のように盾として扱ってくる。蝶ヶ崎先輩も似たような扱いをされることもあるらしい。マジ滅べ、纯粹過負荷共。

『あ、そうだ。少し前に、ここを出て行ってからの怒江ちゃんの後をつけてみたんだけど…、怒江ちゃんって凄いな。僕だったら何度か死んでそうな不幸を笑って対処するんだから』

「……………」

笑って対処、か。愛の試練だとか、まだそんな風に考えているんだろうか。あながち間違いではないことも確かだが。

『前から思ってたんだけど、なんで一緒に暮らしてないの？』
「は？ 何を言ってるんですかあなたは？」

全く想定していなかった質問だった。

『いやだってほら、君達いつもいっしょにいるじゃん。僕にとつては、同棲してないコトの方が驚きだよ』

「…………若い男女が一つ屋根の下で寝泊まりなんて、お父さんが許しても僕は許さないんです」

『本音は？』

「これが本音ですよ。僕は紳士ですからね」

『奇遇だね。僕も紳士なんだ』

「ああ、今流行りの変態紳士ですね」

『いやあ、照れるなあ』

「褒めてないんですか」

『それぐらい分かってるよ？ ただ、僕ってエムだから馬鹿にされるとむしろ嬉しさが…』

「先輩がエム？ なにを戯言を…あれ、でもこの前蝶ヶ崎先輩にズタボロにされてもけろつとしてたような」

『…？ どうして法幸ちゃん僕から離れていくのかな？』

「過負荷に耐性があっても、変態に耐性はないからです」

『うっそだ！。どう見ても怒江ちゃんって変だ！言わせない！』

球磨川先輩が不吉なことを言おうとしたので、エロ本を投げつけてその口を止めさせる。この先輩はとりあえずエロ本を投げつければそちらに興味と注意が行くから非常に有効手段である。

最近に成って、やっと身体はどこかに物を隠しておくことが可能になってきたのだ。少年ジャンプ程度の大きさの物までしか可能ではあるが。

ただ気をつけなければいけないのは、怒江ちゃんがいる時にこの技を使えば僕は彼女に拷問にかけられる可能性がある大であること。そして、球磨川先輩以外にやれば、自分が変態扱いされるであろうこと。とにかく、使用するにはとてつもない注意がいることだけには注意すべし。

『それはそれとして、偉大な先輩であるこの球磨川楔には隠せないぜ?』

球磨川先輩はエロ本を懐にしまうと、少しだけ距離を取っていた僕に近付き、いきなり頬を舐めてきた。思わず咄嗟に後ろに飛び退く。あまりの驚きで後ろに下がり過ぎて、壁にぶつかった。

一体この人はなにをするんだ、もしかしてそっち系の変態だったのか? ?と違って逃亡体勢に入りながらも、先輩の方へと視線を向ける。

『この味は! ……ウソをついている味だぜ、法幸ちゃん』

身構えていたら、なにか聞いたことある台詞を放ってきた。僕はよく知らないが、マンガの台詞だった気がする。球磨川先輩は、いつもより三倍格好付けた顔で語りかけてくる。

『法幸ちゃんが怒江ちゃんと同棲しようとしなのは、紳士的だと

か法律だとか、そんなノーマルな理由じゃないだろう？」

「……………」

『君は、怒江ちゃんを好きにならないようにしているだけ、だろ？』

僕が答えずに黙っていると、先輩は追い打ちをかけてきた。

「……………そう、かもしれませんか」

正直、どうしようもなく凶星だったけれどそれは認めてはいけな
ことなのだ。だから、曖昧に答えた。

球磨川先輩は最後まで普通の^{ノーマル}の人が見たら不快に感じるであろう薄っ
ぺらい笑みを浮かべていて、数秒後には『僕もそろそろ帰るね』
と行って帰っていった。

僕も無言で玄関から洗面台の方へと歩いていく。とりあえず顔を洗
おう。

「さて、怒江ちゃんは無事に帰れているかな？」

ほとんど乱れの無い感情の中、そんな心配と不安だけが浮き出てい
た。実際には心配なんてしない方が心配しないで済むのだが、それ
でも止められそうにはなかった。

数日後。

壁に寄り掛かって床に座り、携帯ゲームをプレイ中の蝶ヶ崎先輩。

ソファーに寄り掛かる形で床に座って、同じく携帯ゲームをプレイ中の志布志。

毎週HDDハードディスクに撮っておいてある特撮番組をソファーに座って静かに見ている怒江ちゃんと僕。

そして球磨川先輩。

『うーん………』

球磨川先輩は、なにかについて悩んでいるような希有な表情をして僕の家の居間、その床を転がっていた。

『僕はどうすればいいんだろうか……？』

思いつめた言動と表情をして、転がり続ける球磨川先輩。

これは…、なにがあったんですか？等と訊ねるといふサインなんだろうか？

だけど、あえて訊ねない。

あなたはそこで一生転がってればいいさ！

僕はそんな風に思い、無視し続けようかと思っていたのだけれど…

…、

「どうしたんですか？ 球磨川先輩？」

怒江ちゃんが耐えきれずに訊いてしまった！

そうだよね。優しい怒江ちゃんなら、フリだと分かっているとしても訊いてあげてちゃうよね。怒江ちゃんって天然なところがあるから、本当にフリだと分かっていたかは正直分からないけれど。

『よくぞ訊いてくれた！』

このまま誰も訊いてくれなかったら、次は裸エプロンを着なくちゃいけなかったから助かったよ、怒江ちゃん。男の裸エプロンなんて誰も得しないしね、いやあ良かった良かった！』

「江迎、よくやった！」

「怒江ちゃんグツジョブ！」

「江迎さん、良い仕事をしてくれました！」

「えーと、別に大したことは…」

球磨川先輩がとんでもないことを言ってくれたので、志布志、僕、蝶ヶ崎先輩の三人で怒江ちゃんの働きに称賛を浴びせる。

怒江ちゃんはいきなり褒められたことで、照れて顔を赤くしていた。うん可愛い。

「それで、球磨川先輩はなにを悩んでいるんですか？」

怒江ちゃんが話を戻す。

『ええ！？ そんなっ！？ 僕がなにか悩んでいるように見えたの』

かい!?

参ったなあ。外には出さないようにしてたつもりだったんだけどな

」

「変な茶番は要りませんから」

仕方ないので、僕も二人の話に入っていく。

怒江ちゃんだけだと球磨川先輩を相手するには、少し不安だ。

『単刀直入に言うけど、お察しの通り、僕は今とても悩んでいるんだ。その悩みについてというのがね、ズバリ』

「ズバリ？」

球磨川先輩の悩みと聞いて少しだけ気に成ったのか、志布志はゲーム機から目を離すと訊ね返した。

球磨川先輩は右手でピストルを作り口元に当てて、目線を横に逸らし、少し切なげな表情で自身の悩みを告げた。

『 恋の悩みさ 』

「……………」

志布志は無言でゲームに戻った。

その気持ちは分かる。

疑問。

なにそれどういうことなの？ あの先輩って恋とかするの？ むしろ、出来るの？

結論。

きつと、ふざけてるだけだろう。

というような思考があったのだと僕は推測する。
眞実は志布志本人にしか分からない。

「……………球磨川先輩の…恋の悩み？」

怒江ちゃんも球磨川先輩と恋愛は上手く結び付かないらしく、首を傾げて頭上にハテナマークを出していた。

「冗談…じゃあないですよね？」

信じられないので、訊き返しておく。

『おいおい、僕だつて恋ぐらいするぜ？　なんていったつて、思春期の青少年だからね。』

それとも、やっぱり、僕なんか誰かを好きになっちゃおかしいかい？』

朗らかに笑みを作っていた状態から、寂しそうな表情をして言う球磨川先輩。

どうやら本当に誰か好きな人がいるらしい。

心底意外である。まあ、それがおふざけの言葉でないと現段階では言いきれないのだが。

「いえ、全然おかしくありませんよ！　過負荷にだつて心はあるんですから」

そんなことを考えている内に、怒江ちゃんが力強い言葉で先輩を慰めていた。

僕は正直、球磨川先輩の『好き』なんて得体がしれないので、簡単

には肯定し難いように思う。というより、球磨川先輩自体の価値観がよく分かっていない状態なので判断しにくいのだ。球磨川先輩は常に嘘ばかり付いていて全く本音を見せないから。……それは、ここにいる過負荷全員に言えることかもしれないけど。

『そう言ってくれて嬉しいよ、ありがとう。怒江ちゃん』

「い、いえ、どういたしまして」

『……それでなにについて悩んでいるかなんだけど、僕の好きな人はね。魅力的な人格と魅力的な心もさることながら、可愛すぎるんだ。』

それはもう、あのかぐや姫の再来と言わんばかりの可愛さなんだ。……かぐや姫なんて見たことないけど』

「それで、なにか問題でも？」

そこが問題なんだよなー、という感じに球磨川先輩が首を傾げたので訊ねてみる。

球磨川先輩は僕の質問にすぐに答えた。

『……僕が彼女の顔に惹かれてるのか、内面に惹かれてるのか分からないんだ。僕は彼女の人格とか心が好きだと言いつつ、結局見た目が好きだけなんじゃないか、アイドル好きの同級生と同じなんじゃないか、って思ってたね』

「……なるほど」

「……………ふむ」

怒江ちゃんは頷き、僕も思案する。割とまともな意見だった。

『二人はどうすればいいと思う?』

僕は少しだけ考えて思いついたことをそのまま言った。
もう少しちゃんと考えておけば、あんなことにはならなかったら
う。

「顔に悲惨な落書きをしてみるとかどうです?」

それは、本当にただ思いついたことを殆ど冗談のつもりでそのまま
口に出したただけだった。

しかし、僕はなぜかその時忘れていたのだ。

この負完全、球磨川袂に冗談など通じないことを

『うん、面白そうだね。明日にでもやってみるよ』

球磨川先輩はにっこりと笑ってそう言った。

え、マジで?

翌日の学校にて。

僕は、安心院^{あんしんいん}なじみとかいう副会長に生徒会室に呼び出された。

「なんで僕が君を呼び出したか分かるかい?」

「……大体は」

「そうだよ。君も僕と同じかそれ以上にひどいことになってるからね」

「いえいえ、そんな風に成ってもあなたは十分綺麗ですよ」

「君はお世辞が下手だね。ま、嘘だとしてもあんまり褒めないでくれよ。外で待たせた君の彼女からの殺気が強まるからさ」

「彼女じゃないですけどね」

「どーせその内、なるようになるさ。この安心院さんには分かる」

「用件はなんですか？ 安心院副会長さん？」

「いや、君の思っている通り用件というもんじゃないよ。」

それと、僕のことは親しみを込めて、安心院さんと呼びなさい」

「……………」

「あの純粋な球磨川くんに変なことを拭きこまないでくれるかな？ 面倒だからさ」

「……以後、注意します」

「……よろしい。それじゃ、彼女を大切にね」

「彼女じゃないですけどね」

そう話し終えた僕たちは、両者とも顔にひどい落書きがされていた。

加害者が球磨川先輩と怒江ちゃんて被害者が安心院副会長と僕というわけである。

ある程度推測はしていたが、球磨川先輩は安心院副会長が好きなのか。本当だとしたら趣味が悪いな。

正直、こんな残念なことになったのには僕の責任もあるので申し訳ないと思わなくもないが、この人はあんまり好きになれそうにないので謝ろうとは思わない。

今後、球磨川先輩の前では軽く口を滑らせないようにしよう。面倒だし。

……思わぬところで、安心院副会長と意見があったが気にしないでおこづ。

それよりも今は、

「生徒会室で副会長さんと十二話してたの？」

怒江ちゃんの不機嫌を直さなくてはならない。

「えーと、この落書きについて」

「ふーん、……嘘じゃないよね？」

「うん、本当だよ」

「…ならいいけど」

怒江ちゃんは、笑ってるけど目が笑ってない笑みを浮かべていた。もし嘘だったらどうなるんだろうか。

とりあえず、その手に持った包丁はさっさとしまってくれ。

第11失敗 「心配ですよ」(後書き)

最近のジャンプでのめだかボックスの展開はすごいですね！。
最近、裸エプロン先輩が好きすぎて生きるのが辛い。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5916v/>

期待外れの男

2012年1月12日02時56分発行